
Heaven or Hell

花嵐 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Heaven or Hell

【Nコード】

N3084D

【作者名】

花嵐 飛鳥

【あらすじ】

天界、それは死した人間の魂が還る場世界であり、人間の魂を監視し守る天使たちが住む世界——…そんな天界で暮らす一人の天使と仲間たちを過酷な運命が襲う——…

序章

気付いたときにはいなかった
——
……

お父さんも
——
……

お母さんも
——
……

兄弟も
——
……

誰もいなかった

「どうしてだよ……」

薄暗い部屋。

壁は白く、床も白い石のような物で出来ている。

部屋の中には必要最低限の物しか置いてない。

また、どの家具も質素だ。

窓は開いていて少し透けた感じのカーテンが風に揺られている。

窓からは月の光が差し込んでいる。

そんな部屋のベッドの上に一人の少年がいた。

上半身だけを起こした状態で長い金色の髪は風にさらさらと流れている。

綺麗な水色をした目は悲しげで濡れたような色をしている。

「どうして……っ」

少年は頭を抱え込む。

どうして家族がないの？

どうして俺は一人なの？

どうして俺は生まれたの？

どうして生きているの？

「俺の存在理由は……………何……………？」

少年の名はクロー「スピア」。

家族を知らない孤独な少年。

これはそんな孤独な少年の物語。

第一話 「説明」

ここは死した人間の魂が還る場所であり、人間の魂を監視し、守る天使たちが住む場所。

そんなこの場所を皆はこう呼ぶ。

『テンカイ天界』と――・・・

+ + + + +

中級戦闘部隊隊長室。

そんな札がドアの上につけられている。

そのドアの前に一人の少年が立っていた。

「はぁ……」

いきなり部屋の前でため息をつく少年。

少年の名前はクロー＝スピア。

天界の天使で中級の天使として働いている。

金髪の長い髪をポニーテールに結い上げていて目は綺麗な水色。

白いロングコートを身にまとい腰に黒いベルトがついている。

コートを止めているエメラルドグリーンの色をした石のボタンからは中級を示す赤色の紐が体を一周するようにつけられている。

少年はコンコンと扉を叩くと入ってと呼びかけられた。

「失礼します」

少年は扉を開けて中に入った。

部屋は散らかっていた。

足の踏み場も無いくらいに書類が散らばっている。

だがこの部屋の所有者はあまり気にしていないようだ。

クローはそんな書類を気にせず踏みつけながら部屋に入った。

部屋の中は少し狭い部屋で壁は真っ白。

書類に埋もれて見えないが床も真っ白だ。

ドアのある壁の向かいの壁は前面窓ガラスだ。

その窓ガラスの前に沢山の書類が詰まれた机があり、その机に向かうようにして椅子に座っている一人の青年がいた。

「よく来てくれたね、クロー」

青年はニッコリの笑う。

「急に呼び出しといて……………何か御用ですか？隊長」

”隊長”と呼ばれた青年はまたニッコリと笑う。

青年の名前はリユラ＝メイム。

下級、中級、上級、特殊に分けられた天使の階級の中級、その戦闘部隊の隊長だ。

髪は少し薄めの青色で右目が隠れるように右側だけ前髪が長い。

目は赤色で黒色の蝶が浮かんでいる。

腕が見えるように肩口から袖がない青色の丈が短めのコートを着ていて、首からは中級を示す赤い紐とその紐についた隊長の証の丸い玉がついたものをつけている。

玉は紐より少し濃い赤色で、真ん中に白い十字架が浮かんでいる。

「クローに頼みたい任務はねえ……」

リュラはガサガサと書類だらけの机を漁る。

やがてリュラは一束の書類を引っ張り出した。

「これこれ」

リュラは書類をクローに与える。

「人間界に中々成仏しない魂がいるんだよねえ……それを何とかして欲しいんだけど」

その言葉を聞いてクローはピクリと反応した。

「まあ内容はその書類見といて。説明めんどいし」

リユラはニツコリ笑う。

「で」

リユラは椅子に座りながらクルクル回り、突然止まる。

「なあゝに逃げようとしてるのかなあ？クロー？」

「！！！」

クローがギクリと体を震わせた。

クローはコソコソと動いていて手は扉のドアノブにある。

「に、逃げる訳ないでしょ！？」

「逃げてるでしょ？」

リユラははあ……とため息をつく。

「まだ治ってないんだ。お化け恐怖症」

「!?!」

「またもやギクリとクローの体は揺れる。」

「そんなクローを見てリユラは業とらしく目元を潤ませて指で拭う真似をする。」

「そんな症状を治すためにこの任務をクローのために用意したんだよ。ああ、何て優しい上司だろう……っ」

「（嘘つけ……）」

虐めただけだろ、ドS隊長が……

だがその言葉は胸中に留めて置く。

もし言ったらただじゃ済まされないから。

「ま、とりあえずよろしくね」

「え——……………」

「行きなさい」

リユラは物凄い笑顔で言う。

だがリユラの背後には凄まじい黒いオーラが出ていた。

そのオーラは行かなければ殺すとも言つかのような黒いオーラだった。

「は、はい……すみませんでした………」

クローは怯えながら任務を承諾してしまった。

第二話 「任務」

隊長室を退出したクローは書類を適当に読みながら隊舎を出た。

一回自分の部屋に戻り、机の上に置かれていたもう一本のベルトを腰に斜めに下げるようにつける。

そのベルトには黒いケースのようなものがついていて右側についている。

そのケースには少し大型の銀色の銃が入っていた。

これがクローの持つ武器だった。

クローは武器と書類を持つと部屋をでた。

++++

部屋を出たクローはてくてくと天界の中心地を目指して歩き始めた。

クローの傍には川が流れていて、橋が沢山架かっている。

天界は川が張り巡らされているような土地をしていて、歩いて幾つもの橋を渡り歩きながら目的地に向かう方法と空を飛んでいく方法以外に小舟での移動手段がよく使われる。

クローは滅多に船という手段は使わないが。

クローは幾つもの橋を渡りながら暗い顔をしていた。

「成仏かぁ……………」

クローはブツブツと呟く。

『まあ相手は子供だし。いくらお化け恐怖症でも大丈夫でしょ』

「って言ってたけど……そんな問題じゃないんだけど」

部屋を出るときのリュラの言葉を思い出してため息を吐く。

そして書類にある成仏させる子の写真を見る。

写真には栗色の髪にこげ茶色の目をしたツインテールの少女が写っていた。

「柊^{ヒイラギ} 莉未^{リミ}ねえ……」

そう呟くクロー瞳は愁いを帯びていた。

+ + + + +

暫く歩き続けるとクローは白い大きな円柱の形をした塔の前にやってきた。

塔の名は『^{セイトウ}聖塔』。

天界の中心にあり、先は見えないほどに高い。

天界で唯一人間界に繋がる門がある塔だ。

他にも繋がってる世界の扉があるらしいが天使が使うことを許されているのは人間界へと繋がる門、『セイモン聖門』しか利用を許されていないので他にどんな門があり、どんなところに繋がっているかなどは全く分らないのだ。

「おい」

「わぁっ!!!」

クローが塔に入ろうとした瞬間クローの肩に誰かの手がポンツと置かれた。

「び、びっくりしたあ…………脅かさないでよ!!」

「別に脅かすつもりは無かったんだが……………」

クローは後ろに立っている少年に叫ぶ。

少年は口では申し訳なさそうな口ぶりだが表情はあまりそういう風には見えない。

少年の名はライザ＝ロイ。

クローと同じ中級の戦闘部隊所属でクローとは昔からの親友だ。

黒い髪に黒い目をしていて、クールで何処か寂しげな少年だ。

ライザは身丈程もある大きな大剣が背負っている。

「ライザもこれから任務？」

「ああ」

ライザいわく、人間界に現れた悪魔の退治をリユラに頼まれたらしい。

「……………やっぱり隊長虐めだよね」

普通俺のお化け恐怖症を思ってくれてるなら俺にその任務が来るだろー！！

「お前も任務だろ？」

「うん。成仏させて来いってさ」

それを聞いてライザを軽く目を見開いた。

「隊長………やっぱりドSだな」

ライザもクローのお化け恐怖症は知っているので率直にそう思った。

「だよね……」

「まあリュウ隊長は怖いから断れないしな。克服するためにどうしても思っ行ってこい」

「ライザも見捨てるの!!!?!」

クローは泣きながらライザに縋ってくる。

こういう反応が面白くて隊長は特にクローを虐めるんだろな………

クローは気付いてないが。

ライザは苦笑するとクローを立てさせて塔の中に入っていった。

+
+
+
+
+

扉を開けると一メートルくらいの足場があり、右に登りの階段、左に下りの階段があり、目の前は空洞。

円柱の形をしていた塔の中を螺旋状の階段があるだけなのだ。

壁には等間隔に火がついた松明が燃えていて、階段には等間隔で扉が並んでおり、入ってきた門より下は全て人間界へ繋がる門だ。

なのでこの下にある門全てを総称して『聖門』と呼ぶのだ。

上にも等間隔で扉は並んでいるが全ての扉の様子が違っているのは確認できるが天使は上に上がることを許されてはいない。

許可があれば入れるがそれも稀なこと。

登りの階段のところには透明の結界が張られており、飛んでも入られないように上に結界が張られている。

「ライザは何番ゲート？」

「146番ゲートだ」

「うわっ結構下の方のゲートだね……」

人間界に繋がる扉には全てに番号がついており、その扉によって人間界の何処に出るのが決まってくる。

聖門は1～200番ゲートまである。

「俺23番ゲート……」

二人は螺旋階段を下りながら慎重に降りていく。

少し降りるとやがて『23番ゲート』と書かれた扉が見えてきた。

「じゃあ……行ってくる……ね……」

23番ゲートの扉に手をかけてクローは震えながらライザを見る。

無理に笑顔を作ろうとしているがはつきり言って笑えてない。

「大丈夫だ。魂とかそういうのあんまり気にせずに接しろ」

そういつとライザは背中から真っ白な羽を広げた。

「じゃあな」

ライザはそのまま階段を使わずに降りていった。

まあ146番ゲートまで歩いてたら時間かかるもんね……

クローはライザの言葉で少し落ち着き、真っ白な羽を広げた。

扉を開けると扉の向こうは綺麗なあ青空と白い雲が浮かんでいる。

「よしっ」

クローは意を決すと扉の向こうに飛び立った。

第二話 「任務」(後書き)

はじめまして！

花嵐 飛鳥と言います。

この話は私が趣味のような感じで書いていた自作の漫画を小説にしたものです！（少し加筆してますが）

ファンタジーと言うことでよく分からない単語などが沢山出てくるかと思います。

そんな時は気軽にどの辺りが分からないのかお伝え下さい。
ちゃんとお答えしていきます。

それでは！

第三話 「少女」

人間界。

そう呼ばれている人間や動物達が住むこの世界。

そんな世界のとある国のとある町。

一人の少女が悲しげに公園に佇んでいた。

少女は栗色の髪にこげ茶色の目をしていて髪形はツインテール。

そう、今回クローが成仏させるようにと言いつ渡された少女 柊 莉
未だ。

少女ははぁ……とため息を吐く。

公園では少女以外にも数人の少年たちがサッカーをして遊んでいる。

すると、少年のうちの一人が思いっきりボールを蹴ったため莉未の方までボールが飛んでいく。

このままだと莉未はボールにぶつかってしまう。

が、莉未は動かなかった。

するとボールは莉未の体をすり抜けてそのまま飛んでいった。

莉未は通り抜けていったボールと自分の体を悲しげに見る。

少年たちもボールを拾いに莉未の近くを通ったが莉未が見えていな

いようだ。

だって莉未は俗に言う幽霊だから。

「ママ……」

ママは何処……？

私と一緒に居たはずなのに……

ママは何処に行ったの……？

「ママぁ……うっ……ひっく……」

少女はしゃがみこみ、そのまま泣き出した。

「どうしたの？」

刹那、一人の少年が莉未の後ろに現れ、莉未の肩に手を置いた。

莉未は目を見開き後ろを振り返る。

現れたのはクローだった。

「もう大丈夫だよ？ 柊 莉未ちゃん」

莉未は驚きながらクローを見つめた。

+ + + + +

一方クローの足はガクガクに震えていた。

「（大丈夫……恐怖心なんかなくせ……俺たちと同じようなものなんだ！！）」

頭の中では怖くない怖くないと思い続けているが足はガクガクに震えている。

だがクローは莉未には気付かれないように顔は必死に笑顔を作っていた。

「私が見えるの……………？おじちゃん……………」

「う、うん……………（お、おじちゃん！！？）（」

俺ってそんなに年寄りに見えるんですか！？

ガキなら他の天使に言われたことはあるけど……………

「え、えっと……………その……………どうして成仏しないの？」

「じょーぶつ？」

「（あー……………こんなの子供に分かる訳ないか……………）んー……………何て言うか……………まだここにいて事は何か未練があると思うんだ」

「みれん？」

「な、何ていうか……こう……心残りがあるとか……探してるものがあるとか……やりたいことがあるとか……そういうの……ない……？」

探してるもの……？

少女の顔が少し明るくなった。

「あのね……」

少女は少し俯きながら答える。

「ママを探してるの」

その言葉を聞いてクローは目を見開いた。

母親を……………？

クローの心を何かが埋め尽くした。

そしてクローはフツ微笑んだ。

「そっか……じゃあ……」

クローは莉未を抱き上げる。

「一緒に捜しに行こうか？」

「……………うんっ!!」

莉未は満面の笑みで頷いた。

「それじゃ、よろしくね。莉未ちゃん」

「うん！ いっしょうけんめいさがそうね……おじちゃん……！」

クローの足は震えていなかった。

「後さ……おじちゃんは止めてくれない？」

「え？」

第三話 「少女」（後書き）

こんにちわ！飛鳥です。

第三話いかがだったでしょうか？

で、早速Q&A！

Q・中級の隊長は上級の方より上なのか下なのか

A・上です。

天界の階級制度をまとめますと。

まず特殊、上級、中級、下級と分かれていて、その中でさらに戦闘部隊、医療部隊、援護部隊と分かれています。

それを位で分けますと。

特殊の戦闘・医療・援護部隊隊長

上級の戦闘・医療・援護部隊隊長

中級の戦闘・医療・援護部隊隊長

下級の戦闘・医療・援護部隊隊長

特殊天使

上級天使

中級天使

下級天使

って感じですよ。

まだ上の位はありますが……

分かりにくくてすみません；

また隊長たちが全員揃ったら分かりやすくなると思います。

そりあえずリユラは上級より上ってことです。

第四話 「遭遇」

クローと莉未は公園を出て少し歩いた場所にある丁字路に来ていた。

車や人通りは少なく、辺りは静かだ。

「じじ」

クローに抱っこされている莉未は丁字路を指差した。

「じじでしんだの」

見れば丁字路の近くにある電柱のところに花束やお菓子が置かれていた。

「ここでね、ママと歩いてたの。そしたらきゅっにつしるからくるまがやってきて……」

跳ね飛ばされた。

即死だったと書類には書いてあった。

書類には莉未とその母親を轢き殺した男の写真と証言が書かれている。

居眠りをしていた訳ではないし飲酒もしていなかったらしい。

麻薬やそういうものを使った形跡も無い。

男性の証言では急に車が母子の方に向かって走り出し、ブレーキも効かなかったという……

「（となると……）」

クローの頭の中に一つの仮説が浮かび上がった。

可能性はある。

クローは一人確信する。

そして莉未をちらりと見た。

莉未は楽しみに足をブラブラさせながら道を見ていた。

その莉未をみてクローは目を細める。

「（やっぱりこの子……………）」

「？どうかしたの？お兄ちゃん」

莉未がクローの顔を覗き込んだ。

莉未の顔は心配そうだ。

「いや、なんでもない。一回天界に君のお母さんが行ってないか確かめてみるよ」

クローは歩きながら天界と通信するためにイヤホンとマイクがついた小さな機械を取り出す。

イヤホンを右耳につけるとマイクが口元に来る。

暫くするとガガガツと音がした。

『こちら中級援護部隊。ご用件をどうぞ』

「柊^{ヒイラギ} 和恵^{カズエ}って人の魂^{マタ}って天界に還^{かえ}ってきてるか確かめて欲しいんだけど」

確か書類に書かれていた母親の名前はこれで合^あっていたはずだ。

『了解しました。確認できましたら連絡を入れます』

ブツツと通信が途切れた。

連絡を待つしかないか……

いたらもつこれで終わりだからいいんだけど……

「よし、じゃあ次は何処に探しに行く？」

「ん〜とねえ……お家!！」

「はいはい」

クローは羽を広げると空に飛び立った。

そんな二人を見つめる黒い影があった。

+
+
+
+
+

「はあゝ……」

疲れた。

本当に疲れた。

あれだけ飛んだり歩き回ったりしてたらなあ……

莉未と会って、母親搜索を開始したのが朝の9時頃。

今は何時かは分からないが太陽は西に沈もうとしており、空が少しオレンジ色になってきていた。

《見イッツケター!!》

急に不気味な声がした。

低くて、少し枯れているような不気味な声。

クローはゆっくりと後ろを見た。

傍で楽しそうに地面に絵を描いていた莉未もそっとクローにしがみつく。

「下級悪魔……………」

現れたのは下級悪魔。

下級悪魔は全員髑髏の仮面をつけ、黒い布を被っている。

大きさは30センチくらいで手には鎌を持っている。

そして何より喋り方が片言というのが一番の特徴だ。

「やっぱり……………悪魔が絡んでたか……………」

クローはめんどくさそうに言う。

悪魔。

それは天使と相反するもの。

魔界という場所に住み、死した人間の魂を取り込もうとする。

取り込まれた魂は二度と天界や人間界に還ることはできない。

そのまま悪魔になってしまうのだ。

または悪魔に食べられるか。

《ソノ子供ヲ渡シテ貰ウゾ！！天使！！！！》

悪魔は鎌を構えた。

++++

キイインッ

ガッ

ドゴッ

悪魔の鎌は近くにあった塀や電柱を切り倒していく。

クローは莉未を抱えて瞬間移動して全ての攻撃かわしていった。

「お兄ちゃん……………」

莉未は心配そうにクローを見つめている。

《天使。才前ノセイデ予定ガ崩レタ》

悪魔は鎌を振り回しながら喋る。

《当初ノ予定ハ女共ヲ殺して連レテイクダケダッタガ……才前ノ
セイデ作戦ヲ変更シタ》

すると悪魔の後ろに三つの影が現れた。

「……」

「あ……」

莉未は目を見開く。

「ママ……………」

現れたのは二体の下級悪魔と莉未の母親だった。

母親の首元には悪魔の鎌が突きつけられている。

「莉未……………」

《サア！！ドウスル天使！！助ケタカタラソノ子供ヲ渡スカ……
…ソノ銃デ自分ヲ撃テ！！！》

「……………」

クローは悔しげに悪魔を睨む。

悪魔三匹はケタケタと高笑いをしている。

するとクローが急にニヤリと笑った。

「お兄ちゃん……？」

「……………」

クローは無言で莉未を下ろすと前に進み出る。

「後ろ、向いてな」

クローは後ろにいる莉未に笑いかけると銃を手取る。

その銃口は悪魔ではなくクローの頭に向いていた。

「お兄ちゃん……っ」

莉未は何かを感じ取ったのかクローに駆け寄ろうとする。

クローの引き金を握る指の力が強くなる。

「待つてよ……お兄ちゃん……！」

バアアアアアンッ

乾いた銃声が響いた。

第五話 「攻撃」(前書き)

少し残酷な表現があります。

苦手な方はご注意ください。

第五話 「攻撃」

銃口から光がカツと光る。

パアアアアアンツ

乾いた銃声が響いた。

莉未は目を見開く。

クローの頭から血が飛び散る。

体がどんどん傾いていきドサリと倒れた。

《ギャハハハハッ！！馬鹿ダ！馬鹿ナ天使ダ！！》

悪魔の一匹が嫌な声で笑う。

《ドチラヲ選ンデモソノ母子ヲ渡スコトニナルコトニ変ワリハ無い
ノニ！！ソレニ氣付カヌトハ！！》

「お兄ちゃんっ！！」

莉未はクローに駆け寄り体を揺する。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

頭からは血が流れていて草を変色させていく。

《邪魔ナ天使モ消エタ事ダシ。仕事ヲ終ワラセヨウカ》

悪魔は莉未に向かって猛スピードで近づいてきた。

「莉未っ！！！！」

母親の声が響く。

莉未はギュッとクローの頭を抱きしめた。

刹那。

ダアアアアアンツ

銃声が響いた。

「え……………」

莉未は銃声を聞いてそろそろと目を開けた。

少し前には悪魔の顔。

だが、悪魔の顔の中心には穴が出来ていた。

《ナ……二……》

「俺もそこまで馬鹿じゃないよ」

莉未はハッと抱きしめていた人を見る。

「お兄ちゃん………?」

「無事?ごめんね、怖い思いさせちゃって……」

クローはむくりと上半身を起こした。

「お兄ちゃん!え……お怪我は……?血は……?」

よく見ると頭にあった傷やついていた血、草を変色させていた血も消えている。

「無傷だよ。」

クローはニコリと莉未に微笑んだ。

《才前……っ銃デ撃ッテ!!》

「さっき撃ったのは攻撃用じゃないからね」

クローは立ち上がる。

「さっき自分の頭に撃ったのは”幻光”^{ゲンコウ}。光を見ると幻覚にかかってうっていう技なんだ。その光を見てみんなには俺が大量に出血して死んでるように見えたって訳」

実際は倒れる真似しかしてないし。

《クソ……っ》

顔の真ん中をクローに撃たれた悪魔はさらさらと砂になって消えていった。

《オノレっ》

残り二体のうち片方がクローと莉未の方に飛んでくる。

クローは悪魔に向けて手を翳した。

「天道術」^{クイン}Q^{カマイタチ}」
鎌鼬」

掌に小さな竜巻が現れ、中に風の刃がいくつか浮かび上がる。

風の刃が悪魔に向かって飛んでいき、悪魔を切り刻んだ。

そして悪魔は砂になって消えていく。

天道術。

それは天使が使える術のこと。

天使になる第一条件はこの天道術が使えるかどうかだ。

天道術には”J””Q””K””A”と難易度があり、これがどのランクまで使えるかも天使を下級や中級に分けるときに基準にされる。

ジャック クイーン キング エース
Jまで使えれば下級、Qまで使えたら中級、Kまで使えたら上級、Aまで使えたら特殊となっている。

後は戦闘能力や医療能力など部隊に応じた能力の高さで階級は決まり、精進すれば上級にランクアップができる制度になっているのだ。

後一匹！！

クローはそう思いとりあえず莉未を守れるように、そして母親を助けられるような位置に立つ。

《チクシヨオオオツ》

最後に残った悪魔は不利を感じたのか鎌を振り上げる。

瞬間移動で莉末の後ろに現れた。

クローは突然のことに目を見開いた。

鎌が莉末に振り下ろされる。

スロモーションで動いているように見えた。

莉未が目をぎゅっと閉じて身を小さくする。

母親が叫び声をあげた。

悪魔の鎌がどんどん莉未に近づいていく。

ブシャアアアアッ

血飛沫が舞った。

+
+
+
+
+

莉未はそつと目を開けた。

待ち構えていた痛みが来ない。

「……………え……………」

目の前にはクローがいた。

母親は目を見開いている。

「お兄ちゃん……………?」

その声を聞いてクローは少し後ろを向くと一瞬だけフツと笑った。

そのまま前を向き、銃を構えた。

「ゴッゴウ
極光」

銃から凄まじい光が放たれ、悪魔は砂になって消えた。

「お兄ちゃんっ！！」

これで終わったんだ！

そう思っ て莉未はクローの方を見た。

するとクローがゆっくりと莉未の方に倒れてくる。

「え……………」

クローの体からは大量の血が流れていた。

左肩から右脇腹にかけて鎌で斬られた傷があり、かなり深い。

血はどんどん流れ出てきて、白いコートを赤く染めていく。

「お兄ちゃん……………」

これも幻覚……………？

そうあってほしかった。

でもこれは現実。

「莉未っ」

母親が走ってきて莉未を後ろから抱きしめる。

「ママ……っお兄ちゃんは……？」

どうなっちゃうの？

第六話 「成仏」

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

莉未は必死にクローを揺する。

それを見て母親は悲しげな目をする。

ガガツと耳につけていた通信用のイヤホンから機械音が聞こえた。

『調べました結果。 柊 和恵は天界に還ってきてはおりません』

「遅い……っつの……」

クローは搾り出すように声に出す。

ハハハ……まさかこの任務で子供を守って大怪我になるとは思わ
なかったな……

しかも大の苦手だった幽霊を守って。

でも知らないうちに体が動いてたし……

後悔はしてない。

クローは薄らと笑った。

「大丈夫……そう簡単に天使は死なないから……」

これくらいなら……まだ何とか……

「でもっ！！放って置いたら死んじゃうでしょ!？」

そりゃそうだけど……

するとカッと母親が光り始めた。

「ママ………?」

母親はフワリと宙に浮く。

「成仏するんだよ……お母さん」

「成仏……？」

「莉未ちゃんに……会えたからね……」

クローはゴホッゴホッと血を吐いた。

「お兄ちゃん!!」

すると莉未の体もカッ光り、宙に浮いた。

「わっ」

「成仏したら……会えるかもね……天界で」

クローは飛んでいく莉未に笑いかける。

「嫌！わたしクローを置いてけない！！」

莉未が叫んだ。

すると莉未を纏っていた光が消え、降りてくる。

「クローが心配だもん」

それを見てクローは苦笑する。

「今度は……俺のせいで成仏出来なかったか……」

クローは自嘲気味に笑う。

「で……どうすればいいんだろ……」

心配で戻ってきてしまったが自分にはどうすることも出来ない。

手当ての知識がある訳でもないし、何か傷口を覆えそうなものもない。

「ボロボロだな……」

莉未があたふたとしていると後ろから低い男の声が響いた。

「ははは……何でここにいるのさ……ライザ……」

莉未の後ろに降り立ったのは、天界の聖門の前で別れたライザだった。

「ライザ……任務終わったの……？」

「とつくに終わってた」

ライザは莉未の隣りにしゃがみこむ。

「ねえねえっ!!」

「何だ？」

莉未はライザの服の袖口をグイグイと引っ張った。

「お兄ちゃん……どうやったら助けられる……？」

「そうだなまずは天界に帰るべきだな」

ライザはクローの上半身を抱き起こす。

「お兄ちゃん……………」

莉未はクローの顔を覗き込む。

「大丈夫……………」

クローはゆっくりと震えながら莉未の頬に手を添える。

莉未は添えられたクローの手をギュツと握った。

莉未の目から涙が伝った。

頬を流れ落ち、クローの傷口にポタリと落ちた。

カッ
ッ
ッ

傷口に落ちた涙がカッと輝いた。

第六話 「成仏」(後書き)

こんにちは！

花嵐 飛鳥です！

読んで頂いてありがとうございます。

是非今後の参考にしたいので感想や評価お願いしますっ！！

第七話 「終始」

カッと輝いたクローの傷口に落ちた莉未の涙。

クローも莉未もライザも目を見開く。

暫くすると光は止んだ。

「何だっ たの……？」

莉未が呟く。

「出血が止まったな」

ライザの冷静な一言にクローは自分の傷口を見る。

さっきまでどんどん血が出ていた傷の血は止まっていて白いコートを染め上げるのも止まっていた。

「やっぱり……」

「え？」

クローの呟きに莉未は頭を傾げた。

「最初会った時から思ってたんだ……莉未ちゃんにはチカラがあるなって……」

「チカラ……？」

「まあ……霊力……みたいな？」

クローは頬を撫でていた手を莉未の頭に乘せて頭を優しく撫でた。

「莉未ちゃんのお陰で……出血が止まったんだ……ありがとう」

クローはニツコリと笑う。

莉未も泣きながら笑った。

ライザもフツと微かに笑った。

「帰るぞ」

ライザはクローに腕を回すと立ち上がり、空いた方の手で莉未を抱き上げ、羽を広げた。

風が吹いた。

風が止んだときにはそこに三人の姿はなかった。

+ + + +

「痛アアアアッ」

天界の一角。

一つの大きな建物の中の一室から叫び声が響いた。

「もう少し静かにしてください、クロー」

「な、ならもうちょっと優しく……っ」

そこは病室でベッドにはクローが髪を下ろして上半身を起こした状態でいて、一人の少女がクローの包帯を換えている。

少女の名前はリビア＝アシュリー。

薄い金色の髪に薄い水色の目をした優しそうな少女で髪はバレッタで止めている。

リビアはクローやライザとは違い、上級にランクしていて上級の医療部隊に所属している。

「あれだけの傷を負ったら仕方ないだろう」

ライザは林檎を器用にうさぎに切ってベッドの脇に置いてある机に置くと窓にもたれ掛かる。

「でも、あのお化け嫌いなクローが守って負傷するなんて……明日は槍でも降るのかなあ」

ベッドの横に置かれた椅子に腰掛けながらリユラはそう言つとライザが剥いたウサギちゃんのエリンを普通に食べ始める。

「隊長……それ俺の林檎……」

「てつきりクローのことだからさっさと終わらせたくて強制的に成仏させるのかと思ってた」

クローの言葉を見捨ててリユラは話続ける。

天使は成仏しない魂が出たときのために強制的に成仏させる方法がある。

クローは大のお化け嫌いだから大半は成仏しない理由など問わずに強制的に成仏させることの方が多い。

クローはリユラの言葉を聞いて目を見開く。

「一緒だったんだよ」

クローのその言葉を聞いて三人がクローを見る。

「母親を探してるって姿が。俺の母親や父親は見つかる可能性がほとんどない。だけど莉未ちゃんには可能性が十分にあった。だから見つけてあげたかったんだ」

家族がいなくなった時の辛さはよく分かってる。

「だから、放っておけなかったんだ」

クローは自嘲気味に笑う。

「ま、お陰で魂に少しは慣れたし。出血も止めてもらっちゃったんだから莉未ちゃんには感謝しなきゃね」

「じゃ、今度からクローの任務には成仏する任務を沢山入れといてあげるよ」

リユラは笑顔で言い放った。

「ええ！？隊長！それは止めてくださいよ！！！！」

「だってさっき慣れたって言ってたじゃんか」

「それとこれとは別ですよ！！！！」

ギヤーギヤー叫ぶクローとそれを笑顔でかわしていくリュラを見ながらライザとリビアは微笑んだ。

+ + + +

真っ暗な空。

そんな空に雷が鳴り響き、そんな雷をバックに崖の上に立つ西洋風の城。

その城の中の一室に一人の少女がいた。

少女は桃色の長い髪をポニーテールにしているさらにその髪を先の方で二つにとめている。

部屋は真っ暗だがとても広い部屋でいくつもある大きな窓には赤い

カーテンがついている。

絨毯も真っ赤で金色の刺繍が施されている。

そんな部屋の中に机と椅子があり、その椅子に座りながら少女は机の上に置かれた水晶玉を見ている。

「この子……………」

少女は呟いた。

水晶には下級悪魔と戦うクローの姿が映っていた。

「可能性はあるわね……………」

雷の光によって映し出された少女の口元はニヤリと笑っていた。

闇が動き出した。

第七話 「終始」(後書き)

読んでくれてありがとうございます!!

今後の参考にしたいので是非感想や評価お願いします。

第八話 「世話」

天界に戻って数日後。

クローは無事退院を果たした。

「ん……っ体鈍っちゃったかなあ？」

クローは体を伸ばしながらリュウがいる隊長室に入った。

コンコン

「隊長………」

クローは入った瞬間言葉を失った。

床に足の踏み場もないほど散らばった書類。

うん、これはいつも通り。

「莉未……………ちゃん……………」？

「あ、お兄ちゃん」

何で居る……？

あれか、これは幻覚か。

幻覚なのか。

「あれ？魂って中心部のこついつところには来れないんだよね？」

魂は天使達が暮らす中心部ではなく離れたところに平和に暮らすのだ。

一人頭を抱えているクローを笑いながらリユラが説明する。

「ほら！莉未ちゃんチカラがあるでしょ？だから天界で天使として働いてもらうことになったの」

「ああ、そうですか……………じゃないっ！！！！そんな危険なことやらせるんですか！！？」

「大丈夫だよーちゃんと見習い天使として天使育成学校アカデミー通わせるし」

「それは当たり前です！！」

アカデミー
天使育成学校は文字通り天使を教育する機関である。

ここで見習い天使として勉強し、配属されるのだ。

「無理矢理じゃないでしょうね……？」

「そんなんじゃないよ。この子から希望してきたんだし」

「え……？」

「そーだよお兄ちゃん!!」

莉未はニッコリ笑いながらクローに向かって走ってくる。

それをクローは抱き止めてそのまま抱き上げる。

「チカラあるって行ってたでしょ？だからお兄ちゃんに何か役立てないかなあと思って」

「お母さんと一緒に暮らさなくていいの？」

「いいの！辛いけど……決めたもん！！」

「そっか……」

クローは微笑むと莉未の頭を撫でた。

「で、俺を呼び出したのは莉未ちゃんに会わせる為ですか？」

「そんな訳ないじゃん」

「やっぱり……」

即返してきたリユラにクローは呆れる。

「まあ用って言うっても莉未ちゃんの世話して欲しいんだけどね」

「……………は？」

「来たのはいんだけどまだ天使育成学校アカデミーに入学届け出してなくてね」

リユラは爽快に笑いながら言う。

「隊長……ちゃんとしてくださいよ」

「最初は此処に居させようとしたんだけど、クローに会いたいって言うしそれに……」

リユラは右下に目をやる。

するとそこから一羽のニワトリがリユラの前の机に着地した。

ただのニワトリじゃない。

サングラスをかけ、懐中時計を首から下げたニワトリだ。

「やりたい放題やりやがって!! コッ コッ!!」

凄くヤクザみたいなニワトリである。

しかも喋るし。

これでもリユラの相棒だ。

「コッ」さん！！？
「.」？

クローは目を見開く。

そんなかつこいい（？）ニワトリ、コッ」さんの姿は——……

ボロボロだった。

鶏冠^{トサカ}は垂れ下がり、羽はボロボロ。

サングラスも傾いていた。

「（「」愁傷様です……コッコさん……）」

ニワトリの名前はコッコ。

本当はちゃんとした名前があるのだが、長ったらしいしニワトリの

癖にそんな立派な名前はいらない（リユラ談）という事で「コッ
さんと呼ばれている。」

「じゃあよろしくね〜クロー」

今日にもちゃんとコッコさんに入学願書届けさせるよと言っている
のを聞いてクローは莉未をつれて部屋を出た。

コッコさんも疲れてるだろうねえ……

+
+
+
+

「何処に行きたいところある?」

「ん〜……」

莉未はキョロキョロと回りを見回す。

「クロー」

「あ、ライザ」

莉未が回りを探索している中、二人の天使がクローに話しかけた。

「何でイ、クローはサボリですかイ？」

特徴的な口調で喋るライザの隣りに居る少年。

髪は腰より長いオレンジ色で目は茶色。

頭には白っぽい帽子を被っている。

袖の長く、パーカーのついた服を着ていて密かに手には白色の手袋をしている。

名前は縁^{エニシ} 錬^{レン}。

クローヤライザと同じ中級の戦闘部隊に所属している。

「サボりじゃないし」

クローはムツツと頬を膨らませる。

「だあれ？」

莉未は頭を傾げながらクローのコートの端を引っ張った。

「あの時の……」

ライザは莉未を見て納得する。

「あ、あの時の黒いお兄ちゃん!!」

「（黒い……）」

そう思いながらもライザは莉未の頭を撫でてやった。

「まあ……ライザは髪と目が黒いもんねえ」

クローは一人苦笑する。

「何ですかイ？この子。」

鍊は莉未を見て頭に？マークを浮かべている。

「あ、まさか……クローの隠し子でs「んな訳あるかアアアッ!!」」

ドゴッとクローのアップアが鍊に当たった。

「……………冗談に決まってるでさア……………」

「鍊の言つことつて冗談に聞こえないんだよね」

「本当に冗談でさア。あれだろイ？隠し妹なんだ」「それも違う！！」

鍊はちえつと言いながら莉未を見た。

「全く……………なんでそこまで隠れにこだわるんだか……………」

クローはぶつぶつ言いながら莉未をつれて歩き出す。

ライザと鍊も興味があるのか一緒についてきた。

莉未を見ている鍊の顔は
.....

何だか悲しそうで
.....

辛そうだった
.....

第八話 「世話」(後書き)

こんにちわ！飛鳥です！！

読んでくれてありがとうございます♪

今回初登場は縁 錬君です！！

錬は今後も色々と出てきます。

何と言っても錬の特徴と言えば口調です！

何弁だったか忘れましたが…(エ

それでは！

ありがとうございます！！

第九話 「動向」

莉未を筆頭に歩き出した四人。

莉未は周りを興味深そうに見渡している。

そりゃそうだ。

人間界での生活も結構短いんだし、初めて見るものも多いだろう。

例えばさっきの喋るニワトリとか（＝コッコさん）

現在、クローたちは天界の本部と呼ばれるところに来ている。

本部には食堂や書庫などがあり、殆どの天使達が利用している。

だが一般天使が歩き回れるのは三階まで。

本部は五階建てなのだが、四階より上は隊長たちぐらいでないと入れないのだ。

そして四人はその本部の図書館に来ている。

「でもこんな図書館には小さい子向けの本なんてありはしやせんぜ
イ？」

錬は上が見えない程に聳え立つ本棚を見回しながら溜息をつく。

「本人が楽しそうだからいいんじゃないか？」

そついうライザが指差す方には楽しそうに図書館を駆け巡る莉未の姿。

「周りに迷惑かけないようにね」

そう言ってる矢先、莉未は突然角から現れた天使と衝突した。

三人は呆然とする。

「痛あ……」

「わ……」

「ゲ……」

莉未とぶつかった人が現れる。

その姿を見てクローは逃げ出しそうになったが何とか堪えた。

「大丈夫？」

莉未がぶつかったのは綺麗な青緑色をした長い髪を一つの三つ編みにし、目は薄い水色の目をした女性だった。

「あ、はい……」

莉未は呆然としながら女性に抱き起こされる。

女性はニツコリと微笑んだ。

女性の名前はメア＝マリアナ。

凄く綺麗な女性で、天使の中でもかなり人気のある女性だ。

だが、そんなメアでも実は上級の天使でしかも戦闘部隊に属している。

「メアさん!!」

クローは駆け寄り、莉未を受け取ろうとする。

が。

ドゴッ

鈍い音が響いた。

クローは飛ばされていき、ライザと鍊はやれやれと呆れてその場を見ている。

「俺のメアに色目使うんじゃないねえ！！！」

クローを殴り飛ばした天使は怒鳴るように飛ばされたクローに言う。

「色目なんか使ってませんよ！！勝手に解釈しないでください！！」

ああ…だから逃げたかったのに……

クローは溜息をつきながら立ち上がる。

クローを殴り飛ばした天使の名はカルト＝ウィーン。

赤い髪を一つにくくり、目は太陽のような金色。

額には白い布が巻かれている。

カルトはメアの恋人で、メアを溺愛していることで有名だ。

そのお陰でかメアに近づくとカルトの怨みの一撃を食らうことになるのでメアに近づく男の人は少ない。

しかもこんなメアを溺愛していて、メアが居ないと生きていけなさ
そうなのこの青年は実は上級の戦闘部隊の隊長だったりする。

「カルト、図書館で大声をしたら駄目でしょう」

「ああ、すまないメア。俺としたことが……ついカッとなってしまう
った」

俺を殴ったことは注意しないんですか？

「うっ………」

一方莉未は目に涙を溜めている。

いきなり怒鳴り声を出されてびっくりしたのだろう。

「ああ、上級の戦闘部隊隊長が女の子をなかしやしたア」

「なっ俺が泣かせたんじゃ……」

「いや、今のは隊長のせいでしょう」

ライザは冷静に突っ込む。

「大丈夫だよ。カルト隊長こんなんだけど怖い人では（多分）ないから」

「今（ ）で何か入ってただろ……」

カルトは呆れた表情でクローに突っ込んだ。

「にしてもカルト隊長が図書館にいるなんてどいう風の吹き回しですかイ？」

鍊は不思議そうに尋ねた。

カルトはじっとしているのは性に合わないらしく、デスクワークや図書館で読書などじっとしていることがとにかく嫌いなのだ。

「いや、少し気になることが生じていてな。俺に回ってきたんだ」

何で調べる人をこの人にしたんだよ。

三人は心の中で呟いた。

「一応、お前達にも伝えておいたほうがいいだろう……」

カルトは真剣そうな顔つきでそういつと図書室を出た。

残されたクローたちもカルトの後を追った。

+ + + + +

「で、何なんですか？ 気になることって」

「悪魔の動向だ」

外に出て歩き始める。

「最近、悪魔が大量の軍団で動くようになってきている」

悪魔たちは基本的になるべく多くの魂を狩り、多くの天使を殺した
いがために大勢での集団行動はとらない。

だがカルトによると最近は大勢の集団で人間界を荒らし始めているらしいのだ。

「大勢で行動……か……」

「嫌ですねイ。大勢でかかって来られたらいくら下級でも生きていられるか自信ないでさア」

「鍊なら生きていそうだな……」

カルトは鍊の性格を考えて言葉に苦笑いする。

鍊はいつもはのほほんとした少し天然っぽい子だ。

基本的に物事には無関心でいつもみんなの会話を静観しているタイプだ。

そんなぼーっとしていて、気の抜けた感じの錬は実は。

キレるとドSになるのだ。

滅多にキレることはないが、一度キレると鎮まらせる事はとても難しい。

「お兄ちゃん」

抱き上げていた莉未がふとクローを呼んだ。

「何？」

「あそこ行つて見たい」

莉未が指差す方を全員が見た。

そして全員顔が真っ青になる。

「あそこは止めよう!」

「止めておいたほうがいい」

「危ないですからね」

三人は必死に莉未の興味をそこから逸らそうとした。

目の前にある白い建物の入り口には”特殊 援護部隊”と書かれた看板がついている。

そしてさらに建物からはこの世の物とは思えないような音や声が響いてきている。

特殊天使の援護部隊。

通称 開発部隊と呼ばれ、天使たちの武器などを作ったりしている部隊だ。

ちなみに隊長はカルトの姉だったりする。

「えゝ行きたい!!」

そういうと莉未はクローから放れて建物に入ってしまった。

「待て！！！」

クローは焦ったように莉未の後を追う。

「もう、お兄ちゃん。何で駄目なの？」

「いや、此処は……」

するといきなりガチャンツという音がした。

クローは瞬時に反応すると莉未の腕を自分の方へ引き抱きしめる。

「天道術」
クイン Q”
マモリタマ 守玉！！」

クローがそう唱えると二人を包み込むように白っぽい半透明の物がクローたちを包み込んだ。

そして術が二人を包み込んだ瞬間、二人を嵐のように弾丸が襲い掛かった。

第九話 「動向」(後書き)

今回初登場は上級の戦闘部隊隊長 カルト「ウィーンとその恋人で
上級の天使のメア」マリアナです！！

カルトはメアを物凄く溺愛しております；

メアに近づく男は全て抹殺しようとしてきますからご注意ください(笑)

そして掠る程度に出てきたカルトのお姉さん！

実は姉弟揃って隊長なんですネ♪

ご意見・ご感想・質問などは気軽にどうぞ！！

して頂ければ私は泣いて喜びますっ！！！！

第十話 「危険」

「はあ……」

弾丸の嵐が治まり、クローは術を解いた。

「何……？さっきの」

「まあ……開発部隊の隊員たちの趣味というか……」

特殊ランク 援護部隊。

通称 開発部隊。

此処に近づく天使はよっぽどのことがない限りいない。

理由はさっき二人を襲った弾丸の嵐。

昔は開発部隊には沢山の天使たちが来ていた。

武器を壊したものの、新しくして欲しいだの様々な理由で。

だが、先代の開発部隊の隊長はそれを嘆いていた。

武器をもっと大切に使って欲しい。

無理に強い武器を使わず、自分にあった武器を使って欲しい。

そう思った先代の隊長が取った手段。

それが部隊までの道のりに武器を仕込むこと。

そうすればよっぽどのがない限り近づきはしないし、その天使の強さも量れる。

そして隊員たちは武器作りに専念できるし、その武器をまた道のりに仕込む。

そうしてこの部隊はどんどん仕込む武器のレベルが上がっていつているのだ。

まあ一部、それを知って此处で鍛錬したりする天使もいるが。

「あゝ……入り口も塞がっちゃってる……」

後ろを見ると入ってきた入り口は消えていて、壁があった。

本当にこの部隊の構造が分からない……

クローはため息をつくと莉未の手を握った。

「もう戻れないし。このまま行くよ」

「うん！」

二人は奥へと進み始めた。

+
+
+
+
+

「行っちゃいましたねィ」

「だな」

その頃、四人は開発部隊前に留まっていた。

「無傷で戻って来ればいいんだけど……」

「心配するな。クローなら何とかなる」

不安げな表情でメアは扉を見つめている。

そのメアの肩を優しくカルトは抱きしめた。

++++

「わあああああつ」

「きゃあああああつ」

一方、クローは莉未を抱きしめ、翼を出して飛びながら攻撃をかわしていた。

現在、天井から雷が二人を襲ってきている。

ピシャアアアッ

ドオオオオオンッ

「普通此处までする！？敵じゃないのに！！」

そついいながらもクローたちはどんどん先に進んでいく。

「はあ……はあ……」

あれか……マジで殺す気だろ……

「大丈夫？お兄ちゃん……」

「へ、平気……多分」

頑張れ、俺。

負けるな、俺……

「体力落ちてるな……やっぱり」

しばらくの入院生活のせいで体が大分鈍っていることに気付かされた。

例えば今は莉未を抱えているからといっていつもならまだまだ行けるぐらいだ。

「……明日から修行しよう」

そう肝に銘じて歩き続ける。

すると扉が見えてきた。

「あれか！」

「出口！！」

二人の顔が明るくなる。

クローは扉に向かって走った。

パカッ

「パカ………？」

二人は顔を見合わせる。

すると急に二人を浮遊感が襲いかかった。

「わああああああつ」

「NOOOOOO!!!」

二人の下に現れたのは大きな穴。

二人は穴に吸い込まれていった。

第十話 「危険」(後書き)

お久しぶりです、飛鳥です!!

全然更新してなくてすみませんでした；

通称開発部隊の迷宮は次で終わらせます；

多分↑

そして莉未とクローを通して天界のことをある程度書けたら次の話に移りたいと思います!!

感想、評価は是非お願いします!!

疑問なども書いてくださればお答えいたします!!

それでは！

第十一話「変化」

あれだよね。

やっぱりこれって苛めだよね？

「ぎゃああああああつ！！！！」

どンドンと真つ暗な穴の中を落下していく二人。

しばらくすると下から光が見えてきた。

「で、出口……………」

二人はそのまま光に吸い込まれるように消えていった。

ドササッ

「痛えっ！！！」

落下して行き着いたところは特殊援護部隊の職場。

周りの天使たちはみんなびっくりしているようだ。

「や、やっと迷宮から出られた……」

クローは上半身を起こす。

さすがと言う所か莉未を庇うように抱きしめ、背中から落下したのだ。

一歩間違えれば背骨が折れてもおかしくない。

「大丈夫？」

ふと、綺麗な女性の声が響いた。

クローは女性を目にして固まる。

「メ、メアさん！！？」

そこには目を心配そうに細めながらクローを見るメアがいた。

「よかったですねィ……生きて帰ってこれて」

「錬!？」

「全くだな」

「ライザ!？」

あれ?外に居たんじゃなかったの?

クローが頭を傾げるとメアは笑いながら言った。

「心配だったんだもの。隊長に連絡を取って安全ルートで此処に入れてもらったわ」

「え……………」

心配してくれるのは大いに嬉しい。

ただどうせなら後ろから追ってきて欲しかった。

「あれ？カルト隊長は？」

先ほどのメンバーより少し人数が足りないことに気付く。

これほどまでにメアに近づいているのにどうして鉄拳が飛んでこないのだ？

「カルトはここに」

また別の女性の声が響いた。

クローは声がする方を向く。

「カ、カルス隊長……」

そこにはカルトと一人の女性。

名前はカルス・ウィーン。

特殊天使の援護部隊、通称開発部隊と呼ばれる部隊の隊長だ。

髪はカルトより少し濃い赤色でセミロング。

目はカルトと同じ金色をしている。

カルトの姉だ。

「どうやら無傷のようですね。女の子を連れていたというのに素晴らしいです。また研究をやり直さなければ……」

カルスの目が怪しく煌く。

今度来るときはまたレベルアップしてるってことか……

クローは呆然としながらカルスに乾いた笑みを見せた。

「大丈夫？お兄ちゃん」

「大丈夫、大丈夫」

クローは笑いながら答えた。

実はかなり腰がヒリヒリしているのだが……

「さ！次行くよ！！お腹空いただろ？」

「うん！！」

クローと莉未が手を繋ぎながら開発部隊を出て行く。

その後をライザと錬が追った。

「変わりましたね、クローは」

「ああ」

その後姿を見ていたカルの呟きにカルトは答えた。

「昔のクローは心を閉じていて、孤独の中で生きていたのに」

今では、あんなに仲間が周りにいる。

「それはきっと、この後にとっても重要になってくる」

「……………」

カルトは姉の言葉を聞きながら無言でクローたちの後姿を見る。

「本当に、莉未ちゃんとは兄妹みたいね」

最後にメアがそう呟いた。

第十一話「変化」(後書き)

やっと登場いたしました！

カルトの姉であり、開発部隊隊長のカルス＝ウィーンです！！

この方はとにかく武器マニアです(笑)

またこれからも登場すると思います。

感想・評価など切実募集中です！！！！

第十二話「撮影」

「何食べたい？」

「ん〜と……カレーライス!!」

本部に戻り、一階にある食堂にやってきた。

昼食を注文し、出来上がった料理をテーブルに運ぶ。

「後どれくらい面倒見てなきゃいけないんだろう……」

クローはげっそりとやつれている。

「まあ、あそこより厳しいところはないでさア」

鍊はオムライスを口に運びながら答えた。

ただ、最後に小さく”多分”と付いていた気がする。

「クロー」

「!」

呼びかけられたクローは声の主を見る。

「スーザン隊長！」

上級天使 医療部隊の隊長 ミズリ「スーザン。

桃色の癖のある髪を持ち、緑色の目をしている。

医療の腕は天才的で、多くの医療部隊の天使が目標にしている天使だ。

リビアの直属の上司でもある。

ミズリはにっこりとクローに笑いかけた。

「メイム隊長からの伝言です。入学の書類に写真が必要なので撮ってくるようにと」

「わざわざ伝言ありがとうございます」

クローが一礼すると、ミズリはそのまま通り過ぎていった。

「写真………か………」

四人は楽しく喋りながら昼食をとった。

+ + + + +

「此处で写真を撮るよ」

「此処？」

目の前にある建物は他の部隊と違い、丸い建物だ。

入り口には看板が立ててあり、” 中級 援護部隊 ” と書かれている。

中級 援護部隊。

前に出てきた通称 情報部隊と呼ばれる通信や情報を司っている部隊だ。

「此処に写真を撮るのが上手い人がいるんでイ」

趣味みたいなかんじけどなとライザは続けた。

「すみませーん」

クローは情報部隊の扉を開けた。

受付の人に用のある人を呼んでもらう。

「あら、久しぶり」

暫くすると、薄い緑色の髪をした女性が現れた。

髪は長く、後ろで一つに結び上げ、目は紺色で赤い丸の模様が浮かんでいる。

中級 援護部隊所属の彩覇^{サイハ} 鳴^{メイ}だ。

「久しぶり、鳴」

「ちょっと用件があつてな」

「用件？」

簡単に説明すると鳴は快く了承した。

++++

鳴はクローたちを自分の温室につれてきた。

中は沢山の植物に満ちており、小さな植物園のようだ。

木々の間を鳥たちが飛び交っている。

「ここに座って」

温室の中心に用意された椅子に莉未を座らせた。

鳴の写真の腕前はプロ級だ。

鳴はカメラを構える。

鳴の写真の腕が凄いのはその育った環境が影響している。

彩覇家は代々鳥を操る一族だ。

鳥によって情報を集め、鳥によって未来を占い、鳥を使って戦うのだ。

そんな一族の長女として生まれた鳴は小さい頃から鳥に囲まれて育った。

また、鳥の成長記録や観察などによってカメラを使う機会も多いので、クローたちの中では一番カメラを使い慣れている天使だ。

この温室も植物を育てるためではなく、彩覇家の鳥たちが住むための温室なのだ。

ちなみにリュラの傍についているコッコもここで育った鳥の一羽だ。

カシャッ

「撮れたわよ。結構綺麗に撮れたと思うわ」

「ありがとう」

カメラから出てきた写真をクローは受け取った。

「これ、入学願書の写真だったっけ？」

「そうでイ」

鳴はそれを聞くとニッコリと笑った。

「リユラ隊長に届けておきましょうか？」

「いいの！？」

鳴はコクリと頷いた。

「ここから戦闘部隊は遠いですから。ラウ」

鳴がそう呼ぶと温室のどこから一羽の鳥が飛んできた。

目つきは鋭く、左目には眼帯をしている。

いかにも幾つもの戦線を越えてきたとでも言っようなぐらい傷跡があった。

「何だ、主」

「これをリユラ隊長に」

鳴は写真が入った封筒をラウに啜えさせた。

「コッコの奴が居るところか」

「よろしくね」

ラウは一つ頷くと飛び立った。

「相変わらずクールだねえ……ラウ……」

コッコさんといい勝負なくらいに大人な雰囲気な鳥である。

もし天使でいたら怖いけど……

「では、お茶会でもしませんか？」

「……………鳴、お前仕事じゃなかったか？」

ライザは頭を傾げた。

職場に居たんだから鳴は仕事でだっただけだ。

「いいんです。ちゃんと行って来ましたから」

鳴はどっからかテーブルと椅子を取り出してくる。

「さ、座って座って。紅茶でいい？あ、莉未ちゃんはオレンジジュース？」

「いいよ、紅茶で」

「うん！」

「昨日焼いたケーキがあるんだ！食べてみてよ」

五人は楽しく温室でお茶会をたのしんだ。

第十二話「撮影」(後書き)

お久しぶりです♪
飛鳥です！

最近文章が適当になったきた感があります……；

次話でここを終えて、その次から話を進展させていこうと思ってます(笑)

是非お付き合いください！！

第十三話「面倒」

「面倒見てくれてありがとね、クロー」

日が暮れた夜。

クローの莉未のお世話は終わった。

「……………」

「そんなに疲れたの？」

クローは顔を真っ青にしながら壁にもたれかかっている。

「だったら、隊長も行ってみてくださいよ」

「嫌だね」

即答かよ。

「とりあえず、明日から正式に莉未ちゃんは天使育成学校の生徒だからね」
アカデミー

「はい！」

莉未は元気よく返事した。

「お兄ちゃん」

「ん？」

莉未はリュウに手を引かれながら振り返った。

「私、立派な天使になって、おにいちゃんの役に立てるように頑張るからね！！」

莉未はニコリと笑うと、リュラと共に天使育成学校アカデミーへと向かっていった。

「楽しみにしてるよ、莉未ちゃん」

クローは少し微笑んだ。

++++

「んっ!」

朝。

窓からは日光が降り注ぎ、とても綺麗な青空が広がっている。

とてもいい目覚め、のはずだった。

ビュンッ

上半身だけ起こしたクローの顔に当たるか当たらないか位のところを猛スピードで何かが通り抜けた。

カンッと壁に突き刺さる音がする。

クローは顔を真っ青にして飛んでいった先をゆっくりと見た。

壁には矢が深々と突き刺さっていた。

矢には紙が結び付けられている。

「や、矢文……………」

一体いつの時代のやり方だよ。

そう思いつつものろのろとベッドから這い出て、矢に結び付けられた紙を手にとった。

パラリと紙を開く。

任務が出来たからさっさと隊長室に来てね、

by リュラ

「もっと他に手段はなかったの!!!!?」

クローは急いで身支度にとりかかった。

++++

「おはようございます」

クローはゆっくりと隊長室に入った。

隊長室ではリユラが優雅に紅茶を飲みながら椅子に座っている。

「おはようクロー。とてもいい天気だね。目覚めも良かっただろう？」

「ええまあ。隊長のせいで台無しでしたけど」

「何か言った？」

「いえ！何でもありません！！」

リユラはにっこりと笑って紅茶を少し口に含んだ。

「で、任務ってなんですか？」

「まあ、保護かな」

「あ、そうですか……って保護！！？」

何の！？

「女の子なんだけど……あ、幽霊じゃないよ？ちゃんと生きてるから」

よかった……

もう幽霊嫌だもん……

「イノウシャ異能者なんだ」

リユラの声が変わった。

クローはそれを聞いて目を見開く。

「異能……者……？」

リユラはコクリとうなずいた。

異能者――……

文字通り、異様な能力を使う者。

天使や悪魔のような変わった術が使える人間を指す。

異能者が誕生する理由は様々。

一つはただ単に突然変異でいきなり発生する。

母や祖父など家系のどこかに天使または悪魔がいる。

他にも色々あるが一番多いのがこの二つだ。

「今回発見された異能者の名前はロゼリベリア。クローと同じ年くらいの女の子。異能者の影響で髪の色が淡いオレンジ色で目は桃色。目にはペンタクルが浮かんでいるらしい。身長は164cm」

「今回は凄く細かい特徴まで教えてくれますね、隊長……」

いつもなら適当に書類渡して終わっちゃうのに。

「いやね、書類が間に合わなかったんだよ。だからクロー、さっき言った特徴覚えてね？」

「え！？嘘！？」

「覚えてよね？」

「……は……はい……」

今、隊長の背後に鬼が見えた気がしました。

「で、それと」

「まだあるんですか」

「クローには新入りの面倒見もしてもらいます」

「はあああああ!？」

「近所迷惑だよ、叫ばない、騒がない」

「え、ちょ、面倒!？新入りの!？」

「うん」

えゝ……俺それ嫌いなのに……

教えるのがとにかく苦手なクローにとって苦手なものの一つだった。

「隊長！隊長は俺が新人りの面倒を見るのが苦手って知ってましたよね！？」

「えゝそうだったっけ？まあもう決定しちゃってるし、よろしくね」

リユラはニヤリと笑った。

この人……っ！！

するとコンコンと隊長室の扉がノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは一人の天使だった。

うつすらと緑がかった肩に付く位の髪に緑色の瞳。

男のようだが体は華奢だ。

「今回クローに面倒を見てもらう新入りのプラハ」ヨナだよ」

「よろしくお願いします」

プラハはクローに頭を下げるとクローに微笑んだ。

「じゃ、二人で任務頼むよ」

「はい！」

「……………了解しました……………」

クローの奮闘記はまたもや始まった。

第十三話「面倒」（後書き）

こんにちわ〜飛鳥です！

クローはまたもや面倒見です……；

この子をここまで面倒見させるようなキャラにするつもりはなかったんですが、今後の展開のため仕方なかったんですね……（苦笑）

是非、感想や意見、評価をお願いします！

第十四話「発見」

ゲートを通り抜けたクローとプラハはヨーロッパの一つの小さな街に
ついた。

「任務はロザ＝リベリアを見つけて、これを渡すと」

クローの手には銀の腕輪。

細かく模様がつけられていて、澄んだ水色の石が埋め込まれている。

開発部隊 カルス＝ウィーンから渡された腕輪で、異能者の能力を
抑えるのだ。

「ってことで探そうか」

「はい！先輩！」

「きゃあああああつ」

二人が探そうとした瞬間、女性の叫び声が響いた。

クローとプラハは同時に下を見た。

クローとプラハの下では女の子が泣きながら走っていた。

その女の子を追いかけるように走っているのは……

「悪魔！！？」

下級悪魔三体だった。

「行くよ！プラハ！！」

「はい！」

クローは腰に下げている銃に手をかけた。

「^{「コウヤ}光矢！」

銃から光り輝く矢が放たれ、一体の悪魔に突き刺さった。

その悪魔は塵と化した。

仲間がやられたのを見て、他の二体が天使の存在に気付いた。

二体は鎌を構え、クローに襲いかかる。

だがその二体はクローに触れる前に後ろから斬られた。

「もういませんか？」

プラハが呼吸を整えながら聞いてくる。

プラハの手には槍があった。

「プラハの武器って槍なんだ……」

「はい」

役目を終えた槍は小さくなっていき、掌に乗るくらいのサイズまで小さくなった。

それをプラハは袖口に入れた。

「あ、あの……」

「あ、えっと……あれ？見えてる？」

クローヤプラハなど天使は一般の人間には見えないのだ。

「先輩、この子……」

「あ！」

淡いオレンジ色の髪

桃色にペンタクルが浮かんだ目

年は見た目の自分と同じくらい

身長は……リビアと同じくらいだから164cmくらいだろう

「ロザ＝リベリア……さん……？」

「え？はい、そうですけど……」

ロザは首を傾げた。

やった……早めに終わりそう……

クローは内心喜んだ。

「えーっと……とりあえず、場所移そうか」

「色々と説明しなければならなと思うので」

それにこの場で説明すると彼女は何もない所に一人で話しかけてい
るというありえない状況が回りの人から見たら見えてしまう。

「なるべく人気のないところがいいんだけど……」

でも、知らない人たちと人気のない場所ですて嫌だよなあ……

でも周りから変な目で見られちゃうし。

「分かりました。なら、こっちへ……」

え、OK？

そんなすんなりと？

「え、知らない人たちと人気がないところなんて行って不安じゃないの？」

「いえ」

ロザは苦笑した。

「むしろ、人が沢山いるところは大好きなので」

「……………」

クローは心の中で納得した。

恐らく彼女は

異能者であるからその人間にはありえない髪や目

そして突然発揮される人間からしてみれば奇妙な技のせいで

忌み嫌われて来たのだろう。

「それじゃあ、行こうか」

二人は口ザの後に続いた。

第十四話「発見」（後書き）

お久しぶりです……作者の花嵐飛鳥です。

やっとテストが終わって復活いたしました。

感想・意見あればよろしくお願いします！

それでは！

第十五話「境遇」

ロザに連れてこられたのは海岸だった。

ロザが砂浜に座るのを見て、二人も座った。

「今から言うことは本当だから、信じてね？」

「はい」

ロザは素直に頷く。

「まず、俺達は天使なんだ」

「天使さん、ですか……？」

「あ、よく人間は勘違いして天使〃幸せを運ぶものって言うけどそんなんじゃないからね」

「はい」

「で、さっき君が襲われていたのが悪魔っていうんだ」

ロザの目が恐怖を映し出した。

「悪魔が君を襲っていたのは君が異能者だからだ」

「異能者……ですか？」

「そう、その髪と目もそうだけど……時々何かありえないこととか起きない？」

クローがそう問うとロザは目を見開いた。

ロザの脳裏に色々な出来事が駆け巡る。

「あります……何度か……」

口ザは声を震えさせながら言った。

「前に……」

初めてありえないことがおきたのは一年前だった。

この髪と目で変な目で見られていたが、この出来事でさらに悪化したのだ。

いつものように変な目で見られながら学校に通っていた。

そしていつも嫌がらせをしてきていた男子が殴りかかってきたのだ。

その時、いつもと違って体が熱くなったのを感じたのだ。

そしていつまで経っても痛みは来なかった。

周りが騒然となったのは聞こえた。

そしてゆっくりと目を開けると自分は淡いオレンジ色の光に包まれていて、男子生徒は5mぐらいまで跳ね飛ばされていた。

それ以来、周りの目は憎しみと恐怖に染まった。

そして時々、何か起こる度に淡いオレンジの光がそれを跳ね返すよ

うになっていた。

「その力、今出せる？」

クローが聞くとロザは顔を横に振った。

「自分から意識して出せないんです」

「ということは自分では制御できないということでしょうか？」

プラハはクローに尋ねた。

クローは頷く。

「その力が自分で制御できないというのなら尚更危険だ」

そしてクローはカルスから渡されていた銀色の腕輪を取り出した。

「ロザ、手を出して」

「？はい」

ロザは不思議そうにクローを見ながら両手を出した。

クローはその手の上に腕輪を置く。

「これは制御装置。これがロザの妙な力を封じてくれるよ」

「本当、ですか……？」

ロザはしげしげと腕輪を見る。

「常につけてて。これはロザの力を封じてくれるだけじゃなくて、君が悪魔に狙われないようにする働きもあるから」

ロザはそれを聞いてゆっくりと頷き、左腕に腕輪をはめた。

「よし、これで任務完了だよ」

「結構早く終わりましたね」

クローがプラハを見てそう言うとプラハは微笑んだ。

そして二人は背中から羽を出すと、空に浮いた。

「ロザ」

クローがロザを呼ぶとロザは顔を上げた。

「これで力は封じられ、異能者ではなくなった。一般人と同じ生活ができるよ。だけど、完全になくなった訳じゃない」

クローはロザを見た。

「その腕輪が壊れたり、外したりすれば力が使えちゃうからね」

クローは苦笑する。

「世界にはまだ異能者は何人かいる。もし、ロザがその力を制御したいと、今日会った悪魔と戦いたいと、世界でまだこの力が何なのか分からずに苦しむ人を助けたいのだというのなら異能者たちが作

った集団がある。そこを探して、訪ねてみるといいよ」

そう言うとクローはプラハと共に空高くに飛び上がっていく。

「……………天使さん！」

「？」

ロザがクローを呼び止めた。

「名前、教えてくださいませんか？」

そう言うロザを見てクローは一瞬目を見開くと、ニコリと笑った。

「クロー!! スピアだよ!」

そついうとクローとプラハはどんどん飛翔し、天界へと帰っていった。

「クロー……スピアさん……」

ロザは天使が消えていった場所をじっと見ていた。

第十五話「境遇」（後書き）

こんにちわ♪

飛鳥でございます。

一つお知らせがあります。

蘿奏 霄様の妖祓師物語という小説があります。

あの小説に鍊と同じ名字のキャラが出てきて、鍊の名前がそちらの小説に出てきたり、妖祓師物語の方の名前がこっちの話に出てきたりします。

が、それは勝手に何かしているとかそういう物ではなく、そういう設定なのです。

要はHeaven or hellと妖祓師物語は微妙に繋がっているのです。

話に支障はありませんが、妖祓師物語も読んでみたいという方は小説家になるうで検索してみてください。

それでは！

第十六話「帰還」

天界に帰ってきたクローとプラハは隊舎で別れた。

「任務の報告書は俺が出しとくよ」

「ありがとうございます」

プラハはそういつと部屋に戻っていった。

クローは中級戦闘部隊隊舎内にある大きなホールに向かった。

そこは壁がガラスになっていて日差しがよく降り注ぎ、植物が植えられ、丸テーブルや椅子がいくつも置かれ、天使たちが交流を持ったり、休んだりする場所だ。

クローは椅子に座ると報告書の紙を広げ、羽ペンを手に取った。

「報告書かぁ……面倒だなぁ……」

でも後輩に任せる訳にもいかないし。

やっぱり先輩なんだから先輩らしさを出さないと。

クローが羽ペンを動かし始めると、一人の男がクローの元にやってきた。

「クローじゃん」

「ん？」

クローが顔を上げるとそこには一人の男の姿。

濃い水色の長い髪を一つに結び、目は薄い水色。

首からはゴーグルが下がっている。

名前はファイニッシュキャロル。

クローたちと同じ中級の戦闘部隊だ。

ファイはクローに向かい合うように座った。

「へえ、異能者の任務行ってたんだ」

「そうそう」

クローは相槌を打ちながらペンを走らせる。

「そうだ、クロー」

「何？」

「さっき兄さんが帰ってきたんだ」

「え、嘘！」

「本当」

ファイは嬉しそうに笑った。

ファイの兄は中級援護部隊の隊長だ。

中級援護部隊は通称情報部隊と呼ばれているため、ラクロは情報を集めるために自ら人間界を飛び回り、情報収集をしているのだ。

そのため、ラクロは天界に帰ってくるのは稀なことなのだ。

「今、報告のために本部に行ってるはずだよ」

「そっかぁ。またすぐに人間界行っちゃうんだよね……？」

「……うん……」

ファイは悲しげな表情で言った。

「出来たら、挨拶したいなあ……」

「後で兄さんと一緒に夕飯食べるつもりんだけどその時にどう？」

「いや、いいよ。兄弟水入らずの時間を邪魔したくないからね」

クローはパタパタと左手を振った。

「そっか、帰ってきたんだ」

クローは呟いた。

++++

本部 四階。

そこにある大きな扉の前に一人の青年が立っていた。

濃い水色の髪に水色の目、首からはゴーグルを下げている。

だがファイじゃない。

なぜなら髪が短いからだ。

彼の名はラクロ＝キャロル。

中級情報部隊の隊長であり、ファイの兄だ。

青年はコンコンと大きな扉をノックすると中に入った。

「遅くなってすみませんね」

ラクロは苦笑しながら中に入った。

中には長テーブルが置かれていて、天使達が座っている。

「いえ、問題ありませんよ」

長テーブルの一番奥に座っている三人のうち、右側に座っている青年が言った。

青年は淡い黄緑色の短い髪、目は右目がアメジストのような紫色、左目は淡い水色。

青年の名前はロンドールイス。

医療部隊を纏めている医療部隊の総統なのだ。

ラクロはそれを聞いてニコリと笑うと長テーブルの一番手前の右側の席に座った。

「それでは、会議を始めましょう」

ロンドは静かに言った。

第十六話「帰還」(後書き)

作者の花嵐 飛鳥です！
こんにちわ。

今後の参考のためには是非感想・意見よろしく願います！

第十七話「会議」

「まず、ラクロ。人間界の状態は？」

ロンドがそう尋ねるとラクロは口を開いた。

「依然、悪魔の動向は掴めません」

何故団体行動を取るようになったのか。

目的は何なのか。

疑問は多い。

「後は、最近異能者が増えているような気がします」

ラクロがそう言つと、会議に出席していた中級戦闘部隊隊長 リュ
ラは少し体を強張らせた。

リュラは胸に手を添える。

駄目だ、動揺しては……

リュラはそう自分に言い聞かせる。

「それぐらいですかね」

ラクロは真剣な眼差しから一変して、ニコリと笑った。

「ところで」

ラクロは長テーブルに視線を向けた。

長テーブルにはいくつか空いた席があった。

「これ重要会議ですよ？なんで全員いないんですか？」

その一言に全員は苦笑した。

「姉貴は研究室から出てこねえ」

カルトがボソリと呟いた。

見るとカルの姿はない。

ラクロはその一言に納得した。

「上級援護部隊隊長は？」

「これも研究室から出てこない」

ラクロの問いにカルトが言った。

ちなみに上級援護部隊は通称 研究部隊と呼ばれている部隊だ。

「じゃあ……下級医療部隊隊長は……？」

「あれはただ単に忘れていただけだろう」

下級医療部隊の隊長は物忘れが激しく、おっちょこちょいで有名だ。

何故隊長になれたのかは今でも疑問だ。

「いない奴には伝えておけ」

長テーブルの先、ロンドの横に、中心に座っている青年は抑揚のない声音で言った。

「これは何かが起きる前触れ。気を抜くな」

青年は静かにそう言った。

青年の名前はソルト＝ディアズ。

全ての戦闘部隊を統べる、戦闘部隊の総統だ。

今までの戦歴を物語るかのように、左目と右頬には傷跡が残っている。

目は血のように赤く、髪は夜闇に溶けそうな濃い紫色。

「では、皆さん職場に戻ってください」

最後のロンドの一言で隊長たちは立ち上がった。

++++

「リュラ」

会議が終わり、職場に戻るために歩いていたリュラは後ろから呼び止められた。

リュラが後ろを向くと、そこには一人の青年の姿。

長い灰色の髪に藤袴色の静かな瞳。

その綺麗な藤袴色の瞳は右目だけ、包帯が巻かれて隠されている。

髪は包帯で一つにまとめられ、首には白い布を巻き、ベージュ色の足さえも隠す程長い布を纏っている。

「バルトか……」

リュラは青年を見てそう言った。

そのリュラの顔はとても穏やかだ。

リュラを呼び止めた青年の名前はバルト＝コウ。

特殊ランクの戦闘部隊の隊長だ。

そしてリュラにとって唯一、心を許せる親友だ。

「大丈夫だったか？」

バルトは静かにリュラに尋ねた。

普段、表情が乏しい青年だが、声音は心配そうに聞こえた。

「大丈夫……」

リュラは悲しそうに目を細めながら呟くように言った。

「随分、動揺していた」

バルトのその言葉が指しているのは会議でのリュラのことだ。

「大丈夫だよ、心配しないで」

リユラはにっこりとバルトに笑いかけた。

「もう、大丈夫だから」

「……………何かあったら言えよ」

これ以上言っても意味がないと判断したのかバルトはそう言つと、職場に戻つていった。

そう、もう大丈夫。

リユラは自分に言い聞かせた。

その時のリユラの表情は辛そうだった。

第十七話「会議」（後書き）

今回は新たにソルトとバルトのご登場です！

今名前を並べてみると結構名前、似てたんだ……と思ってしまいました
すが……；

ソルトはよく友達に塩って言われてますね……可哀想に……
塩は英語でソルトですからね（苦笑）

バルトはリュラの親友です。
付き合いは結構長め。

また二人の出会いなども書けたらいいなあ（笑）

では！

日々精進のため、感想評価お願いします！！

第十八話「緊急」

「よしっ！報告書完了!!」

クローは持っていたペンをテーブルに転がすと報告書を持った。

最後に一通り目を通し、ミスがないことを確認する。

「じゃ、俺はこれ隊長に提出してくるけどファイはどうする?」

「どうしようかな?まだ兄さんは忙しいだろうし……ついてく」

「じゃあ行こっか」

二人は椅子から立ち上がった。

刹那。

ゴーン　ゴーン　ゴーン

鐘が鳴る音が響き渡った。

「何だ？」

クローは動きを止めた。

この鐘は連絡の時になる音だ。

《緊急事態発生 緊急事態発生》

「緊急事態……！？」

隊舎に入ろうとしていたリユラの表情が強張った。

《ゲートから悪魔の大群が天界に侵入 ゲートから悪魔の大群が侵入 戦闘部隊は皆、戦闘態勢に入ってください》

「悪魔が侵入だと……！？」

メアと歩いていたカルトが目を見開いた。

悪魔が天界に侵入。

それは今まで起きたことのない事態だった。

天使は魔界の入り口を知らない。

それと同じように悪魔も天界の入り口は知らない。

だが悪魔は何らかの方法で入り口を知り、攻め込んできたのだ。

「ファイ！」

クローはファイに目をやるとファイは無言で頷いた。

「武器は持つてる。いつでも動けるよ」

「じゃあ行こう!」

クローとファイは隊舎の入り口に向かおうと走り出した。

「待て!」

「た、隊長!?!」

すると隊長 リュラが二人を呼び止めた。

「ライザと鍊を呼んで来い。指示を出す」

「ライザと鍊ですか……?」

「他の隊員には今指示を出した。クローたちはその四人で行動してもらおう」

リユラは真剣な眼差しで言った。

「分かりました。ファイは鍊を探してきて！多分その辺で寝てるから」

「分かった！」

「見つけたらここに戻ってきて。すぐに指示を出す」

「了解しました！」

二人は走り出した。

++++

「緊急事態か」

自室で読書をしていたライザはゆっくりと顔を上げた。

天界と魔界が誕生し、天使と悪魔が生まれて数えられない程の年月がたった。

だが、今までこんなことはなかったと言われている。

「前代未聞の緊急事態という訳か……」

ライザは重い腰を上げると部屋の隅に立てかけてある大剣に目をやった。

「行くぞ……鳳剣」
ホウケン

ライザは大剣の柄を握り、背に背負った。

「ライザー!!」

ドンドンと部屋の扉が力強く叩かれた。

「クローが」

ライザが扉を開けると、息を切らしたクローがいた。

「隊長が呼んでる。今回は俺とライザと錬とファイで行動しろって。指示は下で出すと」

「分かった」

ライザは頷くとクローの後に続いた。

戦いの鐘が鳴り響いた――
……

第十八話「緊急」(後書き)

第十九話「指示」

元の場所に戻ると、そこには既にファイと鍊がいた。

「遅いでさア、クロー」

「そつちが早いの」

「はいはい、口喧嘩は後。指示を出すからよく聞いて」

リユラの一言で四人は真剣な眼差しでリユラを見た。

「今さっき入った情報だと悪魔たちは天界に広がりつつ、ある場所に侵攻している」

「ある場所……？」

ファイは首を傾げた。

リユラは少しの間沈黙すると静かに口を開いた。

「シンカイ
神界だよ」

その言葉に四人は目を見開いた。

「神界、ですかイ？」

神界。

そこは神々が住む世界。

聖塔の上部、普段は入れない聖門ではない門が並ぶ門の一つに神界に繋がる門、神門シンモンがある。

そこから神界に入ることが出来る。

だがライザたちにとってはその門、聖塔の上部にすら行ったことがないのでよく分からない。

「本当は天界に侵入した悪魔の撃退を支指示するつもりだったけど仕方ない。クロー、ライザ、鍊、ファイは聖塔に向かい神界に行きなさい。神界に侵攻している悪魔を殲滅せよ」

「俺達が、神界に……！？」

四人は目を見開いた。

「隊長たちや上級、特殊の天使たちじゃ駄目なんですかイ？」

「僕たちは他の隊員に指示を出さなきゃ駄目だしね。上級、特殊の天使は殆どが重要任務で人間界に出払っている」

「なっ」

上級と特殊の天使の殆どが、天界にいない！？

「恐らくその時期を狙ってきたんだろうね。だから今、天界で一番動かなきゃいけないのは中級って訳。大丈夫、道のりはクローが知ってるでしょ？」

ライザ、鍊、ファイはクローを見た。

「はい!!」

クローは頷いた。

「では、今すぐ四人は聖塔へ向かうように」

「了解！」

四人は一斉に走り出した。

四人を見送ったリユラは静かにため息をついた。

「クローたちを神界に行かせた理由。もっと他の理由があったんだろっ？」

「……バルト」

リユラが後ろに目をやると、リユラの後ろで柱にもたれかかっているバルトの姿があった。

「確かにあつたけど、言う必要はないと思ってね」

リユラは微笑する。

「あのまま天界で戦わせても、クローは向こうが気になって戦いにならない気がしたし」

「でも、クローの他の三人も神界に向かったということはあのことを知ってしまうのだろうな」

「大丈夫だよ」

リユラはしっかりとした声音で言った。

「彼らはあの事を知っても、クローと仲良くしていられるよ」

リユラのその言葉にバルトは微笑んだ。

「行くか」

バルトは立ち上がった。

「ああ、僕たちも天界の悪魔を大方片付けたら向こうに向かう」

リユラはキラリと目を光らせた。

第二十話「聖塔」

「本当に悪魔が……」

外に出た四人は空を飛び交い、戦う沢山の天使と悪魔を見て一瞬立ち止まった。

「戦争、ですねィ」

外に出て分かる。

ただ事ではないということが

深刻な事態であるということが

至る所から炎や煙が上がり、

戦いが繰り広げられ、

血が飛び散り、

断末魔の叫び声が響き渡っている。

「とりあえず、僕たちは聖塔に向かわないと」

ファイのその言葉に三人が頷くと周りから悪魔たちが襲い掛かってきた。

全て下級だが、これでは体力を浪費してしまう。

「仕方ない、クローは聖塔まで行ってもらわないと困るからな。此処は俺がやる。お前ら先に行け」

「ライザ!？」

「だったら僕も……」

「ファイも行け。なるべく戦力は分散しないほうが……」

「いえ、此処は私が引き受けます」

刹那、目の前にいた悪魔が叫び声をあげて消えた。

四人は目を向ける。

「メ、メアさん!？」

「貴方たちが聖塔に着くまで、雑魚は私がやります。先に進みなさい」

羽を出し、宙に浮いているメアは腰にさしている日本刀を抜いた。

「早く」

「ありがとうございます!」

クローはメアに礼を告げると四人は聖塔に向けて再び走り始めた。

《逃ガスカ!》

下級悪魔たちは鎌を召喚すると、四人に向けて鎌を向けた。

「させない！」

メアは悪魔と四人の間に割ってはいると、悪魔たちに刀を向けた。

「氷の陣 ヒョウカフツキ 氷華吹雪」

メアがそう呟き、刀を振ると氷で出来た無数の花びらのような物が悪魔たちに襲い掛かった。

この技は広範囲に無数の氷の花びらを放つので、大群相手には最適の技だ。

そして隙がなく、避けきるのはほぼ不可能。

《クソ……っ》

悪魔たちはどんどん絶命していった。

《コノママ負けタマルカア！》

最後に残った悪魔が鎌を投げた。

そして悪魔は絶命する。

鎌は上手いことに氷を弾き、メアに襲い掛かった。

「天道術……」

ガキインッ

だが、メアが術を放つ前に何者かが鎌を弾き落とした。

「ああ……」

メアは安心したかのように頬を緩ませた。

薄らと目元には涙が浮かぶ。

「大丈夫か？メア」

「カルト……」

メアの目の前に現れたのはカルトだった。

カルトはニツと笑うとメアに怪我がないか確認した。

「俺から離れるなよ」

「……はい……」

メアはそつとカルトの服の裾を握った。

+ + + + +

「やっかついた……」

四人は聖塔の前にいた。

「クロー！ライザ！鍊！ファイ！」

すると四人は呼び止められたので聖塔の扉を開ける前に立ち止まった。

「やっと会えた……」

「リビア……」

呼び止めたのはリビアだった。

リビアは乱れた呼吸を落ち着かせながら言った。

「リユラ隊長から、私も行くようにって言われて」

「リビアがいるなら安心ですア。怪我しても何とかかなりやすからね
イ」

「ああ」

錬の言葉にライザは頷いた。

「神界に行くんでしょう？急ぎましょう」

「うん」

クローは頷くとゆっくりと扉を開けた。

++++

中に入った五人は上りの階段を見た。

クローが先頭を歩く。

その後ろにライザ、鍊、リビア、ファイと続いた。

「上の階はこんな感じなんだなあ」

「あんまり下と変わりやせんねい……」

ファイと鍊は周りをキョロキョロと見ながら言った。

ただ下と違うのは扉の様だ。

一つ一つ違った模様が施されている。

「なあ、クロー」

「何？」

ライザはクローに問う。

「聞きたいんだが、隊長はクローは道を知っていると聞いていた。ということはその辺の天使は入れない神界に行った事があるということだろう？何で行った事があるんだ？」

ライザの問いにクローの表情は一瞬翳る。

そして無理に笑ったような表情で言った。

「後で、教えるよ」

だがクローがその後に呟いた言葉をライザは聞き逃さなかった。

神界に行ったら分かっちゃうんだろうし

いくつもの扉を通り過ぎ、何段もの階段を昇ると、足場が広がっている場所が見えてきた。

「……」

そこを見てクローが急に立ち止まった。

「どうした？クロー」

後ろからライザが問う。

「ヤヌス……」

クローはそう叫ぶと開けた場所にある他より人一倍大きな門の前に

倒れている天使に走り寄った。

「ヤヌス！どうしたの！？」

ヤヌスと呼ばれた天使はボロボロだった。

肩につかない程度の長さの赤い髪を揺らし、ヤヌスは起き上がろうとする。

ヤヌスの顔は目の所だけ穴が開いた白いお面をつけていて表情は分からないが、辛そうに見えた。

「その声は、クローさん……？」

ヤヌスはそういうと上体を起こした。

「え！？」

「は！？」

「!？」

ヤヌスの顔がぐるりと動いた。

ヤヌスの頭には前についていたお面と同じお面がついていた。

「あ、後ろ向いてたんだ」

「クロー、何普通に対応してるんだ!!？」

「どうなってんでイ!？」

みんなの反応を見て、クローは思った。

最初見た時は俺もこんな反応したなあ……

「説明すると、この天使はヤヌスって言って神界の門番なの。で、この子は顔と後頭部に全く同じお面をつけてるの。だから最初はどっちが前なのかわかんないんだよねえ」

「何でまたそんな事を……」

「さあ？」

「それよりヤヌスさん！大丈夫ですか！？」

リビアはヤヌスに走り寄り、右肩の深く大きな傷に手を翳した。

途端、リビアの手が淡い水色を光を帯びて、傷口を治療していく。

「ヤヌス。何があつたんだ？」

クローがそう聞くとヤヌスは必死に言葉を紡いだ。

「悪魔たち、が……神界に……」

「ヤヌスじゃ抑えきれない程なの……！？」

クローは目を見開いた。

ヤヌスは神界の門番をするくらいの実力のある天使だ。

そんなヤヌスでも抑えきれない程の悪魔とは何なのかクローには想像できなかった。

「数が多かったし……何より」

ヤヌスは一旦黙り込むと静かに口を開く。

「魔界の姫がいた……」

その言葉に全員が目を見開いた。

「魔界の姫……ですかイ!？」

「そんな奴、俺達が止められるのか!？」

「しかも他にも沢山の悪魔がいるみたいだからな」

魔界の姫。

天使で彼女に会ったことのある人は数少ない。

たとえ出くわしたとしても、生きて帰れることは不可能に近いのだ。
ただ、噂によると魔界の姫の力は兄である王子の力よりも強く、魔王にも勝るらしい。

「クローさん……」

「ん？」

「私はいいですから……早く神界に……！これ以上被害を増やすわけには……」

「でもヤヌスが……」

「私が残ります」

リビアがはっきりとした口調で言った。

「治療してから、後を追います」

「だけどなるべく別れない方が……」

「だったら僕も残るよ」

ファイが手を上げた。

「クローは先に進まなければならない。ライザは戦力に必須。錬は怪我したときに応急処置が出来る。だったら僕がリビアの元に残るよ」

「でも……」

「こうすればいい感じに戦力が分かれるだろ？大丈夫、すぐ追いつくからさ」

ファイはニツと笑った。

「ほら、早く行って。神界で何か起きたら厄介だろ？」

クローは暫く思案すると渋々頷いた。

「ちゃんと追ってきてよ？」

「行くぞ」

クロー、ライザ、鍊は神界の門を開いた。

第二十一話「戦闘」

「此処が……神界……」

扉の向こうには自然が広がっていた。

綺麗な野原に道が広がり、白色の建物が建っている。

「あれは何なんですかイ？」

錬が指差した先には大きな木があった。

大きすぎてどれでだけ大きいのか分らない。

根の部分もクローたちにとってはビル並の高さがある。

「この上に、大神たちが住んでるんだ」

クローは大木を見上げた。

「クロー兄ちゃん！」

そこへ高い声がクローを呼んだ。

すると、近くの白い建物から少年が走ってきた。

肩につかない程の長さの金髪を靡かせ、水面のように澄んだ水色の瞳を輝かせている。

少年は跳びあがるとクローに跳びついた。

「うわぁっ！キューピッド！？」

「久しぶり〜お兄ちゃん」

キューピットと呼ばれた少年はギュッとクローに抱きしめる。

「キューピット………?」

ライザは首を傾げた。

どこかで聞いた。

そう、天使育成学園で何度も教科書で……

「もしかして、あの愛を司る神の………?」

「そうだよ〜正解!」

キューピッドはにっこりと笑ってライザを見ると、キューピッドは地面に降りた。

「はじめまして！僕と会うのは初めてだね？天使は滅多に神界には入れないし……僕が愛を司る神のキューピッドです……！」

キューピッドは笑いながらライザと鍊の周りをスキップし始めた。

「神って……天使とあんまり変わらないんですね……！」

「ていうか子供だとは思わなかった……！」

「しかも男の子ですしね……！」

二人は呆然としていた。

「あ、そうだキューピッド！悪魔たち神界に侵入したんじゃないの！？」

何か凄く平和そうな空気が広がってますが！！

「あゝ……」

キューピッドは立ち止まり、キューピッドは大木の上を指した。

「何か、てっきり片っ端から神様を殺してくのかと思ってたんだけど……」

一気に大木の上に駆け上がってっちゃったんだ。

キューピッドがそう告げるとクローの目は凍りついた。

「まさか……」

「その後をマルスさんたちが追って行っただよ」

マルスさんが追っていったのならそう簡単に最悪の事態にはなっていないか……

マルスは戦いを司る神。

自分達とは比べ物にならない程の戦闘能力を持っている。

クローは背に翼を出した。

「ライザ、鍊。この木の上まで行くよ！」

「ああ」

「了解でイ」

二人も翼を出す。

クローが地を蹴り飛び上がった。

ライザと鍊もそれに続く。

「クロー兄ちゃん……」

キューピッドは三人が見えなくなるまでそこに立っていた。

+ + + +

「また魔界も頑張っちゃったねえ……まさかこんなに悪魔を連れてくるなんて」

天界の上空にリユラは平然と突っ立っていた。

武器も持たず、腕を組んで天界を見下ろしている。

「お前……戦えよ……!!」

隣りに剣を持って降り立ったカルトはリユラを指差して怒鳴った。

「嫌だなあ、上級の戦闘部隊隊長のカルトさん。中級の隊長の僕がそんなに戦えるわけじゃないですか」

リユラは爽やかな笑顔をカルトに向けた。

「１ランクしか変わらねえだろ！！」

「二人とも言い争いしてる場合じゃないだろ」

リユラ、カルトの下にある建物の上に立っているバルトは呆れた表情で見上げた。

「余裕そうだな、戦闘部隊の隊長共」

声が聞こえた。

低い、男の声だった。

三人はゆっくりと上空に目を向けるとそこには人型をした男が三人立っていた。

「上級の悪魔かあ」

リユラはたいして驚いてもいないようにそう言った。

「お前らの相手は俺達だぜ？」

暗赤紫色の短い髪をした青年がそう言った。

青年はリユラを指差した。

「お前の相手は俺だ」

「僕ですか」

リュラは目を瞬かせた。

「強い人とやりたいんだったら下で立ってる人の方が強いですよ」

「いいんだよ、お前からは強い力が感じる。お前、力を抑えてるだろ？」

「まっさか」

リュラはハハハと笑う。

「じゃあお前の相手は俺！」

エメラルドグリーンの肩より少し長い髪を一つに三つ編みした青年はカルトを指差した。

「ってことは必然的に俺はお前とらしい」

残りの一人、群青色の長い髪をした青年がバルトを見下ろした。

「それじゃあ、始めようか」

暗赤紫色の髪をした青年は不敵に笑って見せた。

第二十二話「開始」

リユラと暗赤紫色の青年は天界の東の上空に移動した。

「お前、名前は？」

「中級の戦闘部隊隊長、リユラ＝メイムだよ」

「メイム……」

青年はリユラの名前を聞いて一瞬目を見開くと、ニヤリと笑った。

「あの事件の生き残りか……」

その言葉にリユラの目は一瞬沈んだ。

「知ってるんですか？」

「結構有名だぜ？天界でもっとも優秀な家柄と言われたクリスティ家の一人が天界から逃げた事から始まった事件だろ？」

「逃げた、ねえ……」

リユラはにっこりと笑う。

「貴方のお名前は？」

「ジン＝クライドだ」

そついうとジンは首元に付いたペンダントを外し、ポケットに入れた。

『さあ、始めようぜ？』

「！！？」

ジンの声がまるで周りを壁が覆ったかのように反響する。

「く……っ」

リユラは右手で頭を抱え、膝を崩した。

『俺の声はなア！脳を刺激し、最終的には神経を犯したり、脳を壊したり、色々できるんだよ』

「神経系への……攻撃か……」

リユラは苛立たしそくにジンを見上げた。

『早々に倒れんなよ？まだまだ始まったばかりだぜエ？』

ジンはニヤリと笑った。

++++

リユラたちの所から離れた場所、天界の北にある森にカルトたちはいた。

「はじめまして、天使サン！俺の名前はレミユエル〃オーウェルだよ」

少年のように明るい性格をした青年は三つ編みを揺らしながらにっこりと笑った。

「俺はカルト〃ウィーンだ」

カルトは警戒するように言った。

「へえ、君がカルト、ウィーンなんだア」

レミユエルは興味深そうに見る。

「有名だよ？上級の戦闘部隊隊長 カルト、ウィーン。 ” 緋色の閃光 ” でしょ？」

「ふうん……有名なんだ、俺」

「あ、でもあの事件の生き残りの方が有名かな？俺そっちの人と戦ってみたかったんだけど」

イラ……

カルトのこめかみの血管が浮き出た。

カルトはレミユエルの指す、あの事件を知っているのだ。

何でもいつもこいつもリユラを……！！

カルトはリユラをライバル視している。

昔から。

しかしリユラはそんなこと気にしていない。

「そいつなら、さっきあの場に居ただろ。青髪の奴」

「えゝ！あの人なのお！？ジンに取られちゃったじゃん……」

頬を膨らませ、不満そうな顔をした。

「まあいいや！」 緋色の閃光”さんと戦えるんだし……さっさと倒してジンの所行かなきゃ」

「！」

シュンツとレミユエルの姿が掻き消える。

周りの木々がザザザッと音を立てる。

カルトは静かに目を閉じた。

暫くしてカッと目を開く。

「後ろだ！！」

カルトは右に体を捻る。

突き出した右腕に鈍い衝撃を感じる。

「よく防げたね」

カルトは右腕でレミユエルの蹴りを受け止めていた。

レミユエルはニツコリと笑う。

「でも、まだまだよ」

レミユエルはそう言うと、右足をカルトの右腕に押し付けたまま、地に着いていた左足は地を蹴った。

宙に浮いた体を捻らせ、レミユエルの左足がカルトの鳩尾に直撃した。

「ガハ……ッ」

蹴り飛ばされたカルトはそのまま後ろにあった木を二本突き抜け、三本目の木にめり込むようにして止まった。

「どんな蹴りしてやがる……！」

息を切らしながらカルトは地面に降り立つ。

「どんどん行くよ？だって俺、あの事件の人と戦いたいもん」

カルトは眉間に皺を寄せて、レミユエルを睨んだ。

++++

バルトは静かに目を閉じ、天界の西にある野原の真ん中に立っていた。

「自己紹介はいるか……？」

「……どっちでもいい」

バルトは目を開くと、上空に立っている青年に目をやった。

「まあ、どうせどちらかは死ぬんだしね。一応言っておくよ、俺の名前はエリック＝ギッシングだ」

エリックは静かに笑う。

群青色の長い髪がさらさらと風に靡く。

「じゃあ、さっさと終わらせよう。俺は、天界を壊したいんだ」

エリックがそういうと、背後にぼんやりと人の顔がいくつも浮かび上がった。

「……………」

「俺は人間界で成仏していない霊の内の、怨霊を吸収して力を増幅させるんだ」

エリックは掌をバルトに向けた。

「マドウジュツ キング
魔道術” K ” アンエン
闇炎」

エリックの掌から巨大な漆黒の炎が放たれた。

バルトは地を蹴り、炎を避けた。

炎が野原の上で燃え盛る。

バルトはそれを無言で見つめ、エリックの方を向いた。

魔道術。

天使が使う天道術と相反するもの。

天道術と同じように J、Q、K、A のランク分けがある。

下級悪魔はJまで、中級悪魔はQまで、上級悪魔はKまで使える。

そしてAが使える悪魔は”^{ジュウニキュウ}十二宮”と呼ばれる十二人の悪魔たちと魔界の王族のみだ。

「君、本当に無口だね。友達いるの？」

「……………別にどうでもいいだろ」

「そうだけどさ、そこまで無口無表情な天使って滅多に見ないし」

「こっつい性格なんだ」

バルトの表情は少しも変わらないし、あまり喋らない。

昔からそうなのだ。

だが、バルトでも少しくらい、笑ったり悲しんだりする表情が微かに出るときがある。

でもそれを見たことがある天使も滅多にいない。

「……………もう終わりか？」

バルトは静かに言った。

「だったら、次はこちらから行かせてもらおう」

早くこいつらを片付けて、合流し、神界に向かわなければ。

「嫌な予感がする……」

バルトはボソリと呟いた。

第二十三話「隊長」

気付いたときには両親はいなかった。

気付いたときに傍にいてくれたのは二人の女性と男性。

血は繋がっていなかった。

そんな事は知っていた。

だけど

それでも二人は

俺を深く愛してくれていた。

+
+
+
+
+

神界の大木の上にある一つの大きな宮殿。

その一室に一人の女性がいた。

女性は真紅の絨毯の上に正座を崩して座り込んでいた。

女性の顔が俯くと、桃色の長い髪が頬の横を流れた。

女性のアカアマリンのような澄んだ水色の瞳は憂いに満ちている。

「どうして戦いなど……………」

女性の名はジュノー。

結婚を司る女神だ。

彼女は平和主義で、天界に悪魔が侵入し、神界にも侵入したという一報を聞いたとき、彼女は泣き崩れた。

「沢山の天使や、神、悪魔の命が失われてしまう」

そんなの、最後に残るのは悲しみだけじゃないですか……

「！」

そんな事を考えていると俯いていたジュノーの顔が突然上に上がった。

ジュノーは目を見開いている。

「誰かが……！」

何者かが、許可なく自分の領域に侵入した。

此处から気配を察するに恐らく悪魔。

それもその辺の悪魔じゃない。

上級よりも、上回る力を持っている。

ジュノーはそれに気付くと、お願いをするかのように、胸の前で手を合わせた。

途端、ジュノーから淡い桃色の光が放たれ、ジュノーのいる部屋が淡い桃色の半球に覆われる。

ジュノーは何処の神よりも強い結界を創生できるのだ。

だが相手は強い、暫くすれば力がなくなり、結界は壊れてしまうだろう。

そうなる前に……

「どうか……どうか皆をお救いください……！大神……！」

ジュノーは悲しみに満ちた瞳で、何もない白い壁を見つめた。

+ + + + +

天界の西の野原。

そこでエリックという悪魔と戦うことになったバルトはひとりポツリと立っていた。

その少し離れたところで、エリックは全身血だらけで倒れていた。

「お前………一体何者だ………！？」

エリックの目が驚愕に満ちている。

「まだ、息があつたか」

バルトはエリックを見下ろした。

バルトの周りからうねうねと黒いものが立ち上る。

バルトは影使いなのだ。

影を操り、相手を操ったり、影で相手を刺したり、影から分身や武器を作り出したりと多種多様なことができる。

今、バルトの周りであうねうねと動いている黒い物体も、バルトの影から生じているのだ。

バルトは殺気を放ちながら、エリックを見下す。

「何者か、か……俺は特殊ランクの戦闘部隊隊長だ」

「特殊……ランクの……！？あの……」影使いバルト「か……！？」

エリックは荒い息を吐きながら、必死に言葉を紡ぐ。

そんな通称だと俺の攻撃が何か丸分かりじゃないか……

バルトはそんな事を思いながら、影で剣を生成する。

「はは……そりゃ俺でも勝てねえな……」

”影使いバルト”の戦いの数々は魔界でも恐れられるほどだ。

「お前は運が悪かったな。俺と当たらなければ、まだ少しは生きられただろう」

バルトは呟くように言う。

「さようなら」

影で出来た漆黒の剣が、エリックの体を突き刺した。

エリックの体はさらさらと灰になり、風に飛ばされた。

+ + + +

カルトは額に汗を滲ませながら、木の太い枝の上に立っていた。
近くの木の枝にはレミユエルの姿もある。

「隊長さんさあ、剣、使わないの？」

レミユエルはカルトの腰にある剣を指差した。

「腰にあるくらいなんだから、剣使いなんじゃないの？」

「いや」

カルトはニヤリと笑う。

「俺の戦闘方法は剣じゃねえ」

カルトは剣を鞘ごと地面に落とした。

「俺は、剣は性にあわねえんだよ」

「は？でも最初会った時、下級悪魔と剣で戦ってたじゃないか」

「あれはトレーニングだ」

「え？」

レミリエルは首を傾げた。

「あの剣はその辺の剣よりもかなり重たくてな。俺はトレーニングのためにあれを重しにしてるんだ」

ドオンツと轟音をたて、剣は地面に落ちた。

地面はひび割れている。

「下級悪魔と戦うときに使ったのは腕の筋力を高めるためだ」

カルトは笑いながら言う。

「俺の本当の戦い方は体術だ」

「！」

レミユエルは目を見開いた。

目の前にカルトの姿はなく、後ろから声が聞こえたからだ。

即座に後ろを見ようとする。

が、その前にカルトの回し蹴りがレミユエルの顔面に直撃した。

レミユエルの体は吹っ飛ばされ、木を何本も突き抜け、岩に激突した。

「あの重しにしてる剣はかなり重いからな。アレを外すと俺のスピードはかなり速い」

目で追ってこれた奴もリユラとバルトぐらいだ。

だから悔しいがカルトはリユラの戦闘能力の高さを認めている。

「目で追えない程早く、頑張ってもこの髪の色しか分からない。だから俺は”緋色の閃光”なんて呼ばれてるんだろうな」

カルトはそういうとレミユエルが叩きつけられた岩の場所まで一瞬で移動する。

「終わりだ」

カルトは跳躍し、レミユエルに踵落としを食らわせた。

それにより岩も砕け、レミユエルはさらに岩の板敷きになる。

カルトは元の場所に戻り、剣を腰に付けると、その場を後にした。

岩の隙間から、灰となってしまうたレミユエルが飛ばされていた。

++++

リユラは頭を抱え込んでいた。

目の前にはジンがリユラを見下ろすように仁王立ちしている。

『クリスティー家の奴だっというから、どんだけ強い奴かと思ってたけど、所詮は中級の隊長か』

「く……っ」

『中級の奴が、この上級の悪魔の俺に叶うわけねえよな！』

「うぁ……っ」

リユラはギュッと髪を握るように頭を抱え込む。

頭に、奴の声が響く。

痛い

頭が痛い

意識が……朦朧としてくる……

《お兄ちゃん……》

リユラはハッと目を見開いた。

声が聞こえた気がした。

消えそうなくらい、か細い声が。

だがこの声を聞き間違えることはない。

この声は……

「見守って……くれているんですか……？」

リユラは消えそうな声でそう言うと、薄く笑った。
そしてヨロヨロと立ち上がる。

『今更、何をして遅いぜ！』

「……………」

リユラは苦痛で顔を歪ませながら、ジンを見た。

『何てったって、武器を持つてる様子がないしな！お前一体いつも何で戦ってるんだよ』

そう、リユラは手ぶら。

だがリユラは手ぶらでいいのだ。

「僕の武器は、常に傍にあるよ」

『何……？』

リユラは薄く笑うと口を開いた。

「コチヨウ ユメ
胡蝶の夢」

リユラの目が赤色の光を放つ。

そして光が消えたと思えば、リユラの周りには白い蝶がいた。

数え切れないほどの数だ。

蝶は淡く、白い光を放っている。

「チヨウランブ
蝶乱舞」

リユラがそう言つと、蝶たちはジンに襲い掛かった。

『わあああああつ!!』

蝶たちの羽がジンを切り刻んでいく。

血に染まったジンはそのまま下に落下した。

リユラもそれを追う様に降りていくと着地した。

「う……っ」

リユラはジンの叫び声を聞いたせいで眉間に皺を寄せる。

頭にガンガンと痛みが走る。

『お、のれ……』

「さっさと終わりにしよう……少し休みたいから」

この状態で、バルトとカルトと共に神界についていけば、絶対に足手まといになる……

「^{ソウチヨウ}争^フ蝶の武 剣」

するとリユラの右手に蝶たちが集まっていき、剣の形になっていく。

「貴方のその声は、結構厄介でした」

リユラはそう告げると、ジンを切り裂いた。

血飛沫をあげ、倒れたジンの体は灰になり、消えた。

「ふう……」

リユラは一息つくと、近くの建物にもたれかかるようにして座り込んだ。

「全く、ボロボロになりやがって、コッコ！」

そこへ、コッコさんが現れた。

「まだ戦いは始まったばかりだぞ！コッコ！」

「うるさいですよ。ちょっと相手が厄介だったんです」

リユラは苦笑気味にコッコを見る。

「少し、休憩させてください……」

「おう……」

コッコはリユラを静かに見ていた。

第二十四話「目的」

宮殿の一室で必死に結界を作り出していたジュノーの顔は苦渋に満ちていた。

汗が伝い、組んだ手はガクガクと震えている。

「大神……大神……」

ピシ……とジュノーの一室を守る結界にひびが入った。

そのひびはゆっくりと広がっていく。

ジュノーの力はもう限界だった。

「あ……！」

パァアアアンッ

澄んだ、ガラス玉が割れるような音が響いた。

結界が割れ、パラパラと破片が舞い散る。

ジュノーは息を切らし、両手を床についた。

どうしよう……

ジュノーは頭をフル回転させた。

自分は戦う術をもたない。

だから、自分が助かるためには誰かが此処に来ない限り無理だった。

自分は助からなくても構わない。

だけど、敵を野放しにし、みんなを死なせるわけには……！

ガチャッ

ジュノーはハッと顔を上げた。

部屋の扉がゆっくりと開いていく。

「どつやら、当たりのようですね」

聞こえたのは青年の声。

青年は穏やかな声で言った。

「貴方が大神の妻、ジュノーですね」

入ってきた青年はニッコリと笑った。

ジュノーは体を竦めた。

ガクガクと震える体を押さえ込もうと、必死に自分の体を抱きしめるようにする。

青年は床につきそうな程の長い綺麗な銀色の髪をさらさらと靡かせ、真っ白な丈の長い服を着ていた。

長い横髪はエメラルドグリーンのリボンが巻きつけられている。

目の横にはエメラルドグリーンの宝石のような模様が三個ついている。

それは上級より上の悪魔、十二宮の悪魔という印だった。

青年の右手からは血がポタポタとめどなく流れている。

結界を破るために怪我をしたのだ。

「私の名前はベルズ＝ミラージュ。まあ、どうせ貴女は殺されるので名乗っても意味はないでしょうが……」

ベルズは穏やかな表情でそう言った。

そして右手の下にある血溜まりを見て、ため息をついた。

「全く、この綺麗で真っ白な私の手が、血で汚れてしまっている。さらに部屋まで。虫唾が走りますね……」

ベルズは微かに眉間に皺を寄せると、ポケットから深緑色の巾着を取り出した。

ベルズはそこから深緑色の半透明の丸い石を取り出した。

「翡翠………？」

それは翡翠だった。

「ご名答、流石は女神ですね」

ベルズは微笑みながらそう言うと、傷だらけで血で赤く染まった右手で翡翠を握り締めた。

するとベルズの右手の中から淡い緑色の光が放たれた。

ジュノーは咄嗟に目を閉じた。

暫く輝くと、そのまま光は収まっていく。

ジュノーはゆっくりと目を開けると、ベルズの右手の怪我は全て癒え、血も消えていた。

床にっていた血まで消えている。

「ベルズ」ミラージュ、でしたね？」

「ええ」

「あなた方の目的は何でしょう……」

天界に、神界に侵入した目的は……

「この私が教えるだけでも？」

ベルズはクスリと笑う。

「では、少しヒントをあげましょう」

ベルズはジュノーの方に足を進め始めた。

「私達が此処に侵入したのは、闇を探しにきたんですよ」

「闇……？」

ジュノーは頭をフル回転させた。

闇、神界に来て闇……

ジュノーは目を見開き、ベルズを見上げた。

「その反応、わかったみたいです。そして、あなたは何か知って

いるはずですよ」

ベルズはジュノーの目の前で立ち止まった。

「あなたは女神の中では一番上の女神のはずですからね」

ベルズは巾着から半透明の濃い緑色の石を取り出した。

石には赤い斑点がある。

「吸い尽しなさい、フラットストーン血玉」

石から血の色の煙が発生し、ジュノーの体を包み込んだ。

「これ、は……っ」

ジュノーは辛そうな表情で必死に言葉を紡いだ。

「さあ、吐いてもらいましょうか？ 闇の場所を」

ベルズの目が鋭利に光った。

第二十五話「宮殿」

大木の上まで飛んだ三人はその状況に目を見開いた。

「こんなに多くの悪魔が……っ」

神たちがいる宮殿の前には大量の悪魔。

地面が見えないほどたくさんいる。

そんな悪魔たちの隙間をすばやく動き回り、戦っている姿をクローは見つけた。

数は二人と二匹。

「あれは……」

するとその二人と二匹が悪魔たちの中心に集まり、何やら呟いている。

「げっ……まさか……ライザ！錬！衝撃に備えて！！」

「は？」

錬は首をかしげた。

するといきなり赤い閃光が走り、すさまじい衝撃が三人に襲いかかった。

「く……っ」

「な……っ」

「……っ」

三人は腕で顔を覆うようにし、足を踏ん張って衝撃に何とか耐えた。

「な、何なんでイ……」

そして三人が目を開けた眼前には数十匹の悪魔と男性と女性と狼と鳥の姿。

「あの量の悪魔を……一瞬で……」

ライザは愕然とし、その光景を見た。

「クロー」

男性が三人の姿に気づき、クローを呼んだ。

「マルス、さん……」

クローは些か顔を引き攣らせながら、男たちの前に降り立った。

男の名前はマルス。

先程、キューピッドが言っていた戦いを司る神だ。

血のような赤い長い髪を毛先の方で一つに結び、鋭い目は闇色。

ライザと錬はクローの後ろに降り立ち、膝をつき、顔を下げた。

「面を上げなさい」

女性が二人に静かに告げた。

ライザと鍊は顔をあげる。

女性の名前はベロナ。

戦いを司る女神で、マルスの妻。

闇色のセミロングの髪を風に靡かせ、目はアメジストのような澄んだ紫色。

二人の周りには生き物がいた。

一方は普通の物よりひと回りほど大きい狼。

左目は眼帯をしている狼だ。

名前はラウ。

もう一方はカッコウ。

嘴より上は包帯で覆っているため目は見えない。

名前はシリル。

カッコウは狼の背にとまった。

「その辺の上級の悪魔とは明らかに格の違うものたちが宮殿に侵入した」

「宮殿に……」

マルスは静かに告げた。

「私たちはこれを殲滅させなければなりません。あなた達は宮殿に向かいなさい」

上級悪魔とは格が違う者たちを、俺達が追う、ということか……

「待ってくださいベロナさん！そんな奴のところに俺達を送ったって……」

「分かっています。あなた方は中級、倒すことはできないでしょう」

「だったらなんで……」

「しかし私たちはここから離れられないのです。なのでクロー、なるべく早く向かいますからせめて足止めをなさい」

「足止めを……」

そんな簡単なものじゃないんだけど……

ベロナは手にしていた拳銃を宮殿の方に向けて何発か放った。

一発一発が大きく爆発し、宮殿の前を覆っていた悪魔たちを消し去る。

「道は開けました。行きなさい、三人とも!!」

「ラウ！お前も三人に着いていけ」

「な、マルス!!?」

ラウは目を見開いて主であるマルスを見た。

「こっちはシリルがいる。お前は行け」

「……………わかった」

ラウは渋々承諾すると、クローの横に移動する。

「行くよ、ライザ、錬！」

「ああ」

「行けるところまで頑張りませア」

「悪魔の匂いを追っ！俺の後についてこい！」

三人はラウの後ろを走り、宮殿に入った。

第二十六話「養子」

「う……」

「まだ吐きませんか」

ジュノーはベルズの術により意識が朦朧としていた。

おそらく、この術は生気、気力、全てを吸い取る術だ。

ジュノーは朦朧とする意識の中でそう思った。

「さあ女神、闇の場所を吐きなさい。吐けば術を解いて差し上げま

しょう。女性を殺すのは綺麗じゃありませんからね」

ベルズはほほ笑む。

「私は……何も、知らない……っ」

「まだそう言いますか。貴方は知っているでしょう？では選択肢をあげましょう」

ベルズは人差し指を立てた。

「貴方が闇の場所を吐くか、大神を呼ぶか……貴方にある選択肢はこのどちらかです」

「私は……どちらもしません……っ！」

「ふう……強情な女神ですね。では、仕方ない」

ベルズの目が鋭利に輝いた。

「うぁ……っ」

ジュノーの表情が先ほどよりも辛そうに歪んだ。

「このまま威力を上げていきましょう」

ベルズは惨忍に笑った。

全身が痛い——………

ジュノーはぼんやりとした頭で思った。

でも、もう痛くて、辛くて、感覚がなくなってきた。

神だって不死じゃない。

おそらくこのままだと

私は死ぬ。

怖くない、恐ろしくなどない、死ぬ事など

ただ、一番悲しいのは

「大神……………」

最愛の夫を残していくことと

ジュノーの脳裏に金髪の少年が浮かぶ。

夫と同じくらい愛していた、息子を残していくこと。

ジュノーの目から、涙が零れ落ちた。

ごめんなさい、私は戦う術を持たないから

弱くて、ごめんなさい。

ジュノーはゆっくりと目を閉じた。

「母様アアッ」

叫び声が聞こえた。

ジュノーは最初、幻聴だと思ったが、そのあと扉を蹴破る音が聞こえた。

そんな、こんなところにいるはずがない。

だってあの子は……

ジュノーは最後の力を振り絞って微かに目を開けた。

ダ
ア
ア
ア
ン
ッ

銃声が響いた。

するとパリィインツと何かが砕けた音が響く。

ジュノーを覆っていた煙が消え、ジュノーは床に倒れた。

「クロー……？」

「母様！」

「貴方……どうして、ここに」

クローはジュノーの上半身を起こしてやる。

その後ろからライザと鍊とラウが息を切らして入ってきた。

「母様………？」

ライザはクローとジュノーを見て、呟いた。

目の前にいるのは女神の中でトップと謳われる女神、ジュノー。

それは知っている。

問題は、その女神をクローが母様と言ったことだ。

ライザは隣にいる鍊を見ると、鍊も呆然としている。

「なんだ、お前らは知らないのか？」

ラウはカリカリと後ろ脚で首元をかく。

「いや、もう何が何だかさっぱりわかりやせん」

「クローはジュノーの息子なんだ」

「は！？」

クローが

女神の息子……？

「といっても養子だがな」

「養子？」

いや、養子でも女神に拾われるって凄いぞ………

「本当の両親は知らない。だが、女神と大神は何か知ってるみたいだった」

でなきゃ、その辺の子供を拾うわけがない。

「クローも、よくあの環境で挫折ずに生きてこれたと思うぜ」

「どういうことでイ」

「クローを拾った女神と大神はクローの本当の両親を知っているみたいだった。だけど二人は何も言わなかった」

だから、他の神々はクローが信用できない者が多かった。

「特に、昔からの習慣に捕らわれてる神は不機嫌でな。クローを見る目は冷めていた」

そんな環境でも、クローは引き籠ることもなく明るく生きていた。

「俺はすごいと思ったね。俺だったら引き籠るもん」

ライザと錬はクローに目をやった。

クローは泣きそうな目でジュノーを見ている。

「でも、だったらクローは別に天使になる必要はなかったんじゃないんですかイ？」

第一、女神と大神の養子なのだから神の扱いを受けるだろう。

クローはそれを隠して、天使育成学校に入った。

「それはクローが望んだのさ」

「クローが？」

「どっかの神が」クローは本当の息子じゃない”って言っていたのを聞いてしまったらしくてな。だったら自分に神のような扱いを受ける権利はないとでも思ったんだろ」

そしてクローは養父母の女神と大神をお願いしたのだ。

あのときのクローの目はかなり真剣だった。

「女神と大神は止めたが、クローは聞かなかった。だから渋々、クローを天界に送ったんだ」

ライザはリュラの言葉を思い出した。

”道のりはクローが知ってるでしょ？”

隊長は知っていたんだ。

クローが女神と大神の養子だと。

だからこの任に就かせた。

一番神界を知っているのはクローだから。

「へえ、それが女神と大神の息子？」

声の方に全員が目をやった。

ベルズは巾着の紐に指を引っ掛け、巾着をくるくると回す。

「凄く弱そうだけど。力はお母さんに似ちゃったのかな？」

「母様は弱くない。それと、俺は養子だから血は繋がっていない。」

だから母様は関係ないだろ」

クローはソファーにジュノーを横たえると、ベルズを見た。

右手は銃に添えられている。

自分では敵わないことはわかってる。

せめて、マルスさんたちが来るまで足止めを……

ドオオオオオンッ

轟音が響いた。

「何……！？」

すると黒色の光が走り、ジュノーの部屋が吹き飛ばされ、すさまじい風が吹き、家具や壁の残骸が飛びかった。

「母様っ！！」

クローはジュノーを抱きしめ、衝撃から守る。

「く……っ」

ライザは爆風により段々後退していくのに心の中で舌打ちし、大剣を抜いた。

大剣を床に突き立て、剣に掴まり、衝撃に耐える。

鍊はライザの肩を掴んだ。

しばらくして黒い光が収まり、風が止んだ。

クローはゆつくりと目を開けた。

そしてそのまま愕然とする。

部屋の原型はなかった。

上は青空が広がり、壁もほとんど残っていない。

家具はすべてどこかに飛んで行ってしまったようだ。

クローは周りを見回し、全員の無事を確認をする。

「こおんな所にいたんだあ」

少女の嬉しそうな声が聞こえた。

第二十七話「標的」

全員が声のした上を見た。

空には蝙蝠のような羽を羽ばたかせながら、二人の少女がいた。

「今までどこに行ってらしたんですか？」

「せっかくの外なんですもの。リヨン様は興味津津で……」

一人の少女は疲れたように溜息をついた。

少女の名前はディン＝ドロー。

ディンは赤い長い髪を一つの団子にして、さらに余った髪は団子の下に出されており、さらさらと風に靡いている。

眼は綺麗な紫色、眼の下から眼尻にかけて濃いピンク色の勾玉模様が三つある。

深い赤色の服は胸元は大きく空き、へそ出し。

スカートも同じく深い赤色で、かなりのミニスカで鎖が緩く巻いてある。

首からは鎌のついたペンダントをさげ、靴は深緑色のロングブーツ。ブーツの側面の上の方には髑髏が付いており、ブーツにはベルトと鎖が巻きついている。

一方、リヨンと呼ばれた少女はにっこりと笑っている。

桃色の長い髪をポニーテールにしているさらにその髪を先の方で二つにとめていて、風で靡く

さらに横髪は毛先がカールしている。

目は髪より少し濃く、澄んだ桃色。

服は深い赤色のドレスを身にまとって、スカートの前は動きやすいように開いていて、さらに黒いショートパンツをはいている。

深い赤色と黒色のボーダーのニーソをはき、黒色のパンプスを履いている。

「姫様、女神のトップ、ジュノーを見つけました」

「姫、様……………？まさか……………！！」

ラウは目を見開いた。

「おや、今頃気付かれましたか？」

ベルズは不敵にほほ笑む。

「あちらの方の名はリヨン＝マーリン様。魔界の姫君ですよ」

「魔界の……………姫……………」

あの、兄である王子よりも強く、父である魔王の力をも圧倒するだ

ろつと言われている、魔界の姫！？

クローは目を見開いた。

「あら、私がちょっと気になってた子もいるじゃない」

リヨンはクローに目をやった。

「ねえ、女神 ジュノー、まだ意識ある？」

「……っ」

クローの腕の中にいたジュノーは微かに瞼を震わせた。

「一つ答えてよ。これに答えてくれたら気を失ってもらっても構わないわ」

リヨンは目を細めた。

「その子、クロー＝スピア君だっけ？その子？闇の場所って」

リヨンの一言にジュノーは目を見開いた。

「闇の場所が、この天使だということですか？姫様」

ベルズは驚いたように問うた。

「私の直感だったんだけどね。その反応からするとそうみたいね」

リヨンは不敵に笑った。

「一体、何のこと………？」

クローは訳が分からず、頭を傾げた。

「本人には知らせてないの？」

リヨンはまじまじとクローを見た。

「まあいいわ。とりあえず闇を引きずりださないと。どうやったら出るかしら？」

「女神から吐かせましょうか？」

「いいえ、さっき一つ答えてって言ったし、引きずりだすわ」

リヨンはニヤリと笑う。

「さすがに、体が瀕死状態に陥ったら、嫌でも出てくるでしょう」

リヨンの言葉にベルズは巾着を握り、ディンは首に下がった鎌のペ
ンダントに触れた。

「我に応えよ」

ポウ……と鎌が淡い紫色の光に包まれる。

「全てを無に」

鎌が身丈ほどの大きさになった。

デインは鎌を手を取った。

「ジュケツガマ
呪血鎌」

鎌の持ち手の先には髑髏がついており、髑髏の口から黒い煙が紐のように細い状態で刃に巻きつくように漂う。

「はっ
」

デインは鎌を振り上げ、クローに向かって振り下ろした。

「わ……っ」

クローはジュノーを抱えて何とか避けた。

「ラウ!!」

クローはラウの元に急ぐと、ラウの背にジュノーの体を乗せた。

「急いで安全な場所に。あいつらの狙いは俺だ」

「クロー……」

「急いで!!」

ラウはジュノーを背負ったまま、名残惜しそうにクローを見ながら部屋から飛び出した。

「ライザと鍊も……ラウの後を追って」

「んなことできる訳ねえだろ!!」

「だって、二人を巻き込んだのは俺だし……ゴフッ」

鍊は思いつきりクローの頬を殴った。

クローは少し飛ばされ、座り込む。

「鍊!？」

「ぐちぐちぐちぐち五月蠅いんでさア」

鍊は静かにクローを見下ろした。

「神界にきた時点で、それなりの覚悟はしたつもりでイ。俺は戦い
まさア」

「俺もだ」

ライザは大剣を床から引き抜いた。

「全部一人で背負い込むな」

「俺たちは、仲間だろイ？」

二人はクローに手を差し出した。

クローは少しの間目を瞬かせると、微笑んだ。

「うん」

クローは二人の手を取った。

二人はギュッと掴むと、クローを立たせる。

「別れの挨拶はできましたか？最も、最後は全員あの世で再会できるでしょうが」

ベルズは微笑みながら、巾着から濃い黄色の石をとりだした。

「押しつぶせ アラゴナイト」

ベルズが石を放ると、石は一気に強化化した。

そして三人目がけて転がってきた。

「あいつは俺がやりませア」

「錬！」

錬は石に向かって駆け出した。

手袋をとり、ポケットに突っ込む。

そしてガツと石を両手で押さえた。

足を踏ん張り、なんとか堪える。

「どうするんですか？そのままだと押しつぶされますよ」

だが、錬は微かに笑った。

「！！」

シューウウウウ……

鍊の手元から微かに煙があがる。

「何ですか……」

ベルズは怪訝そうに眉間に皺を寄せた。

そしてベルズが一步足を踏み出したと同時に石がドロリと溶けた。
液体となって床に広がり、そのまま気体になる。

「貴方、一体どんな能力を持っているんですか？」

レンシヨウ
「鍊掌」

錬はボソリと呟いた。

錬の能力は手で触れた物を溶かす能力だ。

普段は特殊な手袋をしているお陰で、日常生活に支障はないが、素手で触れると何でも溶けるのだ。

加減すれば気体にまですることが出来る。

「ほう、変わった力をお持ちですね」

「そうですかイ？」

錬は首を傾げた。

「とりあえず、あんたの相手は俺でさア」

錬はベルズを指差し、ニヤリと笑った。

第二十八話「危機」

「錬……」

クローは錬とベルズの戦いを見てぎゅっと手を握り締める。

大丈夫

何が何でも

二人は死なせない

「よそ見してる暇あるの？」

「……」

ディンの鎌がクロー目がけて振り下ろされる。

クローは咄嗟に腰に下がっている銃を抜き、ディンに向けて撃つ。

デインは鎌を回転させ、撃ち落とす。

「極光!!」

銃から光の渦が放たれる。

デインは光に飲まれる。

「よし……!」

「何処が?」

光が弾け飛ぶ。

デインは無傷で平然と宙に浮いている。

デインは大きな蝙蝠のような羽を羽ばたかせてクローを見下ろした。

クローは顔を苦渋の色に染めた。

+ + + + +

一方、一人冷静に剣を持ったまま立っていたライザはふと顔をあげた。

「久しぶりね」

「……………」

ライザの目の前に降り立ったのは魔界の姫 リヨン。

先程までの無邪気な表情とは違い、少し悲しげな笑みを浮かべている。

「生きてたのね……」

「ああ」

「もう会えないと思ってたから……まさかこんなところで会うことになるとは思わなかったわ」

そして私たちは敵同士。

戦わなければならない。

「見逃してはもらえないのか？」

ライザがそう問うと、リオンは静かに首を横に振った。

「これは魔界の繁栄がかかってるから。失敗するわけにはいかないの」

ライザは無言で納得する。

何故魔界がおそらく最強と謳われる大事な姫を天界に送り込んだのか。

それはこの仕事はかなり重要だからだ。

「一体何をする気だ……魔界は」

「さあ？」

リオンは不敵に笑って見せた。

「魔界は動きだす」

全てを

飲み込むために

「あああああっ」

「!」

叫び声が聞こえた。

ライザは声の方を向くと、そこには黒い霧に包まれた鍊の姿があった。

「鍊!」

「来るんじゃないでさア!」

鍊は何とか保っている意識でライザに叫んだ。

錬の隣でベルズは不敵に微笑んでいる。

ライザは錬の言葉に動いた足を何とか踏ん張った。

錬は意識を失いそうになりながらも必死に頭を働かせた。

この術は、女神 ジュノーに使っていた技と同じ。

あの時クローは靄の中にあつたこの技の核である石を撃ち砕いて消した。

だったら……その核である石を……！

錬は必死に、だけどベルズには悟られないように手を動かし、石を探していた。

するとコツン、と指先に何かが当たった。

錬はそつとそれを握る。

丸い手に収まる冷たい何か。

体が一気に冷えるのを感じた。

これが核だと錬は確信し、口元が微かに笑みを浮かべる。

「もうそろそろ死ぬというのに、笑みを浮かべられるとは馬鹿ですか？」

「馬鹿じゃ、ないでさア……」

錬は力強く核を握りしめた。

残っている力を振り絞る。

そして錬は手の力を抜いた。

指の隙間から液体と化した石が零れ落ち、ポタポタと床に斑模様を作る。

「……」

ベルズは目を見開いた。

靄は消えうせる。

鍊は気力で立つと、ベルズ目がけて地を蹴った。
意識を失いながらもベルズの腕を掴んだ。

「私の腕を掴まないでくれますか？汚らわしい」

「ハア……誰が、離すか……よ」

「！」

腕から焼けるような痛みが走った。

ベルズは鍊を思いつき振り払う。

鍊は吹っ飛ばされ、瓦礫に背中から激突する。

ベルズは憎々しげに鍊に掴まれた腕を見た。

掴まれていた場所は服は溶けており、肌が見えている。

肌は赤黒く焼けている。

ベルズは舌打ちした。

鍊は瓦礫にもたれるように座り込み、ベルズを見て仄かに笑みを浮かべる。

「貴様……」

ベルズから殺気が湧き上がる。

そして今までの見下したような余裕そうな笑みを浮かべていたような表情から一遍し、眼に殺意と怒りが浮かんでいる。

「この私をこんな汚れた状態にするなど……貴様は私が殺ります」

ベルズは鍊に向けてゆっくりと歩き出す。

取り出した巾着の中から石を物色しながら。

鍊は浅く呼吸を繰り返しながら見ていた。

自分に近づいてくる怒り狂ったベルズを。

だが、鍊には逃げる余裕もなかった。

さっきベルズの腕を掴んだのも奇跡なくらいだ。

「鍊!!」

ライザが剣を持って駆け寄ってくるのが見える。

「鍊!!!!」

デインと戦っていて余裕のないはずなのに、クローが攻撃をかわしながらもこっちを見ているのが見える。

「墮とせ 黒玉」
ジエッタ

視界が真っ黒に染まった。

「錬！」

剣を構え、ライザが錬と暗闇の間に立った。

「来るな、つつつたる……！」

「誰が見捨てるか！」

もう、俺は大切な奴を亡くさないと俺はあの時誓った！

「行くぞ、凰剣……！」

闇が、迫ってきた。

刹那

視界が淡い白色の光に包まれた。

第二十九話「救援」

「これ、は……」

ライザと錬の目の前には白い蝶たちが舞う。

「胡蝶の夢 蝶乱舞」

声が聞こえた。

すると蝶たちは闇に向かって飛びかかった。

白い光と黒い光がぶつかりあい、爆発した。

「う……っ」

「大丈夫？」

「隊長！」

後ろから現れたのは自分たちの上司 リュラ＝メイム。

その傍にはコッコさんの姿もある。

「無理な戦いをさせて悪かったね。それでも、生きててよかったよ」

「隊長……」

リュラはポン、と鍊とライザの頭の手をおいて優しく撫でた。

++++

「よかった……」

クローは隊長の登場に少し安堵する。

「気を抜いて大丈夫なの？」

「！」

デインが後ろに回り込み、鎌を構える。

クローはすぐさま体を捻ると、鎌を銃で防いだ。

だがデインはニヤリと笑う。

すると銃が鎌を受け止めているところから黒く染まっていく。

「なっ！？」

そして銃は弾けて消えた。

「貰い！」

デインの鎌がクローの首を捉えた。

「クロー！」

その様子を見ていたライザは駆け出そうとする。

「大丈夫」

「隊長！？」

驚いた表情のライザにリユラは微笑んだ。

「僕だけがここに来たわけじゃないんだよ」

「エイヘキ
影壁」

そう聞こえたかと思えば、クローとディンの間に薄く、黒い壁が地面からのびた。

だが、薄いのに関わらず、壁は意外にも頑丈で、ディンの鎌を防いだ。

「何……！？」

「エイガ
影牙」

地面から黒い棘がのび、ディンの体を貫いた。

「く……っお前は……」

ディンは何とか急所を外した。

そして下を見た。

棘の傍に静かに立っているのは特殊ランクの戦闘部隊隊長 バルト
「コウ。」

「クロー！こっちこい！」

「カルト隊長！」

カルトはクローの腕を掴むと、リユラたちの傍まで俊足で移動する。

「は、速い……」

「これくらいで酔うな」

「いや、結構速いと思うよ」

リユラは持たされていた重い剣を渡す。

クローは地面にひざをつき、呼吸を整える。

「ディン」

一方、リヨンはディンの元まで飛んだ。

「申し訳、ありません……リヨン様。大丈夫ですから」

「急所はずらしたようですからね」

リヨンはトン、と影の棘に触れると、影が一瞬にして消えた。

流石のバルトも軽く目を見開く。

リヨンはディンの体を支えて、降り立った。

「大丈夫です、リヨン様」

デインは鎌を掴んで、立った。

「厄介ね、戦闘部隊の隊長たちまで寄ってきちゃったわ」

リヨンの目が鋭利に煌めいた。

すると黒い龍がリヨンの周りに現れ、クローたち目がけて突っ込んだ。

「影壁……！」

バルトはクローたちの前に飛び込むと影で壁を作った。

龍は壁に激突する。

ピシ、と壁にひびが入った。

バルトの顔が微かに苦渋に歪んだ。

リヨンはニヤリと笑った。

すると龍の威力はさらに上がり、影の壁を突き破り、バルトを飲み込んだ。

「バルト！」

龍はそのまま天に昇り、地面に垂直に突っ込んだ。

そして龍は消えていく。

「バルト！」

リユラが駆け寄ると、地面は瓦礫だらけで足場がかなり悪い。

リユラは翼を出し、飛んで中心に向かうと、真ん中でバルトが倒れていた。

至る所に裂傷があり、地面には血が広がっている。

バルトをここまでやるなんて……

リユラは魔界の姫の威力に驚かされるばかりだ。

そして、おそらくあれは本気じゃない。

力を半分出しているかどうかも怪しいところだ。

リユラはバルトに肩を回すと、クローたちのところまで運んだ。

「バルト隊長！」

「バルトがここまでやられるなんてな……」

バルトの様子を見てカルトは唇を噛んだ。

「俺が、治療を……」

「やめなさい、錬」

錬も外傷はないが、相当の怪我を負っている。

一方、デインはリユラの姿を見て軽く目を見開いた。

「まさか、あの隊長……リユラ……メイム……？」

その呟きが聞こえたリユラは目を見開き、そちらを見た。

リユラの脳裏に駆け巡る、血濡れた記憶——……

「お前は……あの時の……！」

リュウから殺気が立ち上った。

第三十話「往昔」

人間界で大昔、一つの事件があつた。

「リユラ！リユレ！忘れ物はない？」

石造りの建物が建ち、道も綺麗に煉瓦が敷き詰められた古き町並みのある街。

そこに幸せそうな四大家族が住んでいた。

「大丈夫」

「行つてきまゝす！」

ベージュ色のショルダーバッグを掴み、少年はニコリと微笑むと家の扉を開けた。

その後ろを同じ鞆を肩にかけた少女が追う。

二人共薄い青色の髪をしていて、肩に届くか届かないか程度に切つてある。

眼は赤色。

少年の名はリュラ＝メイム。

少女の名はリュレ＝メイム。

双子の兄妹だ。

「いつてらっしやい」

その二人を静かに見送る女性。

母親のクリシュナ＝メイムだ。

長い腰まで届く空色の髪を一つの三つ編みにして、眼は同じ赤色。

そんなクリシュナの背後から、肩を包み込むようにもう一人現れる。

「行っただか」

名前はクロード＝メイム。

双子の父であり、クリシュナの夫。

双子と同じ薄い青色の髪。

瑠璃色の瞳は愛おしそうに双子の背を見ている。

「でも」

クリシュナは悲しげな瞳で双子の背を見ている。

「この幸せな時間が、いつまで続くのか……」

そんなクリシュナをクロードは抱きしめた。

「俺達を守ってやろう。あの子たちの幸せを……」

「ええ、そうね」

この先、何が起きても

++++

「お兄ちゃん、帰ろ！」

「そうだね」

学校での授業を終え、二人は帰るために学校を出た。

西の山に沈もうとしている夕日がオレンジ色に空を染めている。

「ん？」

近くの屋根の上に、二つの人影があった。

逆光で、顔までは見えない。

「どうしたの？」

「いや、あそこに……あれ？」

隣を歩くリュレが首をかしげて尋ねてくる。

だが、リュウが指をさした時、そこに人影はなかった。

「何もないけど……」

「ごめん、気のせいだから気にしないで」

確かに、何かいたはずなんだけど……

リュウはしばらくそこを見つめると、歩き始めた。

「気づいてたわね、あの子」

「本能、って奴か？」

屋根の上にいた二つの人影は空に移動していた。

背にある大きな蝙蝠のような翼が、人ではないと訴えている。

「あそこに、今回の私たちの標的がいるのよ」

++++

「ただいま」

ガチャリ、と家の扉をリユラは開けた。

「あれ……?」

いつもならすぐそばにあるリビングから微笑みながらおかえりと言ってくれる母の姿はなかった。

「お母さん、いないの?」

リュレは心配そうに言った。

「母さん?父さん?」

だが、返答はない。

ガタンッ

「!!」

奥から、物音がした。

リュレは怯え、リュラの腕にギュッと抱きついた。

「誰か、いるの……?」

「わかんない、けど……」

なんだか

嫌な予感がする

リュウは一步一步、家の奥へと足を踏み出した。

その後ろをリュレが追う。

一番奥の扉までやってきた。

中からは微かに声が聞こえる。

「母さん？」

間違いなく母の声だった。

「リュウ！？」

ドア越しに聞こえる、驚く母の声。

「母さん……？」

リュラはドアノブに手をかけた。

「駄目よー!!」

「!-!!」

「来ちゃダメ!リュレと共に逃げなさい!-!!」

「お母さん………?」

そして部屋の中から響き渡る、叫び声。

「母さん！！？」

叫び声にリュラはドアを開けた。

「！！」

リュラは部屋を見て、目を見開いた。

割れた窓、ボロボロのカーテンや絨毯、壊れた家具。

白い壁には赤いものがベッタリと付き、部屋の真ん中に倒れている父の姿。

そして、ドアを背にするようにドアの目の前に立っている母の姿。

リュラは咄嗟にリュレの目を手で塞いだ。

「父、さん……母さん！父さんが……！」

リユラは母を見上げると、母はゆっくりとリユラを見た。

「逃げ……て………」

そういつと、母の口から血が零れた。

そして、右肩から血が吹き出し、母の体は床に倒れた。

「母、さん……母さん……！」

噴き出した血が、リユラにも降りかかる。

リユラはそれも気にせず、母の傍に駆け寄った。

その時、視界が開けたリユレは目の前に広がる光景に目を見開いた。

「お父さん……？お母さん………？」

「こいつらが、これらの子供か」

「……！」

聞いたことのない声が聞こえた。

リユラはすぐさま顔をあげた。

そこにいたのは鎌を持った、まるで赤い死神のような二人組だった。

第三十一話「両親」

「誰、だよ……お前ら……母さんと父さんを殺したのは……！」

「私たちよ」

長い、赤い髪を靡かせ、一人が口を開いた。

「残りは貴方と、そこにいるあの子」

「それで任務は終了なんだよな？」

「ええ」

赤い長い髪の少女の隣に立つ、赤い短髪の少年は少女に尋ねてリュウたちを見た。

少女は静かに頷いた。

「だったら、さっさと終わらせるか」

少年の手にある巨大な鎌が鈍く煌めく。

「どうして……二人を……！」

「理由はただ一つ、任務だから」

任務………？

「お前たちは何も知らずに生かされたんだな。それは幸せなのか、不幸せなのか」

少年はククク、と笑う。

「元 特別医療部隊隊長 クリシュナ・クリスティー。異能者
ロード・メイム」

「悪魔^{コッチ}ではただの邪魔にしかならねえ。その辺の天使だったらよかったが、よりによって隊長だ」

「それにこの異能者、普通は人間にはない力が使え、人々から忌み嫌われ、若くして自殺する者が多い……なのに生きて生きて、さらには力を使いこなすようになった」

「そしてこの二人が手を組んだ。それを知った魔王様は厄介な芽は早々に摘んでおいたほうがいいと判断された。だから俺達が来た」

「あなた達は、見て、殺すか殺さないか判断しろとのご命令。私はどちらでも構わないけど」

「別に殺しておいても損はないだろ？」

生かして何かあったら面倒だしな、と少年は言った。

「または、利用するという手段もあるけれど」

少女は長い髪を指に絡めながら呟いた。

「天界で六大家と呼ばれる名門の一つ、クリスティー家の血が流れているんですもの。利用価値はあるわ」

「だったらよ……」

少年は少女に小声で話す。

「……………いいかもね」

少年の提案に少女はニヤリと笑った。

そして大きな鎌をリユラに向ける。

「！」

やばい……

頭に鳴り響く警鐘。

この人たち、やばい。

「リユレ……！」

振り返ると、呆然と扉の近くで座り込んでいるリュレが目に入った。

「リュレ……！逃げて……！！」

だが、リュレは微動だにしない。

「リュレ！リュレ！」

リュレだけでも

リュレだけでも……！

誰か

誰か

誰か……！

リュレだけでも……！！

少女は鎌を振り上げた。

「リュレ、早く逃げて……！」

リュラがそう言った瞬間、リュラの右目を鎌が切り裂いた。

「あああ ああ あああああつ」

噴き出した血が、更に部屋を赤く染める。

「うあ……あ……」

リュラは床に倒れた。

痛い

痛い

何かが

体を蝕むように

染み込んでくる

「お兄、ちゃん……お兄ちゃん……！」

呆然と座り込んでいたリュレがリュラを必死に呼ぶ。

「リュ、レ……」

逃げて

逃げて

リュレだけでも

生きて欲しい……

「泣か、ないで……」

リュレ……

第三十二話「願望」

リュレ……

ごめんね、リュレ……

兄ちゃん弱いから、お前を守ることが出来なかった。

ごめんね、リュレ……

+
+
+
+
+

「リュレ…逃げ、て……」

リュレは必死に言葉を紡いだ。

だが、リュレは微動だにしない。

赤髪の少女は、髪を揺らしながらリュレに近づいた。

そしてリュレを担いだ。

リュレは特に抵抗せず、腕は力なく揺れている。

リュレ……

誰か……

リュレだけでも、助けて……

助けて……！！

ドンツと轟音が響き渡った。

リュラに近づこうとしていた少年は、音がする背後をふり向いた。

壁や窓が崩れ落ち、空に浮かんだ満月が、静かにリュラたちを照らし出した。

「リュレ………！！」

リユラはリュレたちがいた方に手を伸ばす。

そこでリユラは意識を失った。

+
+
+
+

「……………ん……………」

目を覚ますと、目の前には真っ白な天井が広がっていた。
上体を起こすと、リユラは真っ白な部屋のベッドにいた。

傍の窓からは、白い建物の町並みと、緑色の森が広がっている。

空は綺麗な青空だった。

「……は……？」

「ここは天界です」

「！」

聞いたこともない声が聞こえた。

声のする方を見ると、そこには一人の青年がいた。

綺麗な若葉色の長い髪を緩く一つにくくり、アメジストのような綺麗な紫色の瞳はとても優しい。

青年は子供を安心させるように、優しく微笑む。

「安心してください、怪しいものではありませんよ。………と言って貴方がすぐに信用してくださいとは思っておりませんが」

青年は微苦笑を浮かべる。

「私はロンドールイスといいます。クリシュナ・クリスティー……
…貴方の母の後輩であり、部下です」

「え……………！？」

母さんを知って……………しかも後輩？部下？

「貴方のお母様は何も話していないようですね。自分のことについて、天界について、天使について」

まあ、仕方ないかもしれませんが、などと言いながらロンドはベッドのそばに置かれた椅子に腰かけた。

「自分がどんな経緯でここにいるのか、覚えていますか？」

「えっと……」

リュレと一緒に学校から帰ってきて………そしたら………

リュレははっと何かに気づき、目を見開いた。

「リュレは！？母さんと父さんとリュレはどこですか……！？」

「落ち着いて……」

ロンドはしっかりとリュレの両肩を掴んだ。

「落ち着いて、聞いてね？」

ロンドの言葉に、リユラは言葉を失った。

「嘘……………」

貴方のお母様とお父様はお亡くなりになりました。

そして

妹様は 消息不明
です。

第三十三話「呪詛」

リュレが

消息不明……………？

「嘘……………でしょ？」

嘘だと、言っ
て欲しい……

だが、ロンドは鎮痛な面持ちで首を横に振った。

「我々が現場に着いた時、すでに妹様の姿も、悪魔の姿もありませんでした」

いたのは、血だらけの貴方だけ。

「妹様については、生きているのか死んでいるのかさえ定かではありません」

「…………っ」

リュレ……

「妹様が心配なのは分かりますが、ご自分の心配もした方がよろしいですよ」

「え…………？」

「貴方は生き残った代わりに、大きな代償を得てしまいました」

ロンドは静かに言うと、鏡をリュラに渡した。

リュラは鏡で自分の顔を見た。

「何……これ……」

右目の周りに黒いひし形がいくつか浮かんでいた。
目を中心にするように花のように浮かんでいる。

「簡単に言えば呪いです」

「呪い……？」

「貴方は悪魔の攻撃を受けましたか？」

「あ……っ」

右目に、女の悪魔の鎌を

リユラが小さな声でそう言つと、ロンドは右目の模様に触れた。

「ここに運び込んでから、こういつのに長けている方に貴方の呪い
をなるべく抑えていただきました」

抑えるまで、貴方は暴れまくって大変でしたよ、とロンドは微苦笑
を浮かべながら言った。

「日常生活に支障はないでしょう。抑えているのでそれ以上呪いが
酷くなることはありません」

ロンドの言葉にリユラはホッと息をついた。

「ただし」

「ただし……？」

「貴方が、クリスティー家の秘術を使わなければの話ですが」

++++

天界には六大家と呼ばれる六つの一族がある。

その内の一つがクリスティー家だ。

六大家にはそれぞれ秘術があり、一族の人間にしか使えない特殊な術なのだ。

リユラは母親がクリスティー家の人間であるため、クリスティー家の秘術が使える資格がある。

クリスティー家の秘術は目を使った技。

だから相手の悪魔は目に攻撃をし、使う度に呪いは広がる。

それは抑え込むことができない。

ロンドの説明にリユラは目を見開いた。

「呪いが広がったら、どうなるんですか？」

「……………そうですね」

ロンドは静かに告げた。

「――死にます」

リユラはそつと、模様に触れてみた。

こんなものが自分を死に追い詰めるなど、とても思えなかった。

「しばらくゆっくり安静にしてください。この先のことは、それから決めましょう」

「この、先……」

ロンドは微笑むと病室から出て行った。

「この先、か……」

家族はいない

何もかもが壊れたこの世界で

僕はどう生きていけばいい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084d/>

Heaven or Hell

2010年10月12日00時55分発行